



求道

第拾貳號

第五卷

(明治十四年十二月一日發行) 每月一回發行

(明治十四年十一月二十日) 第三種郵便物認可

求道第五卷第拾貳號目次

求道

◎如來の廻向

感謝

◎一年の回顧◎歳末の感謝◎感慨感謝

講話

◎攝取の心光

告白

◎世諦の苦みによりて眞諦の光を見る

牧田平太郎

◎歡喜之記

長野貞一

◎故長谷部候補生遺簡

講義

◎歎異鈔——第拾章

近角常觀

◎草津雜詠

敷咏

紹介

◎佛說無量壽經佛說阿彌陀經梵文和譯◎梁川遺稿寸光錄◎梁川遺稿書簡集◎エビクテタスの教訓◎釋迦牟尼傳◎正信偈講話◎香月院語錄◎雜誌「布教」

◎求道學舍報恩講

時報

講話

求道學舍

每日曜午前九時

〔本郷森川町一帯地〕

第二求道會

毎土曜午後二時

〔九段坂佛教俱樂部〕

第三求道會

毎月二日午後七時

〔日本橋蛸蝋町般若教所〕

求道

第五卷
第拾貳號

如來の廻向

親鸞聖人が他力眞宗を開闢したまひて、從來の自力佛教の方向を正反對に一變したまひたる中軸は實にこれ如來廻向の一語である。而してこの事は決して宗旨や教理の出來事のみではない、やがて是れ、吾人眼前に於ける人生の一大事實である。即ち何人も生來差別根性に固執して日夜自力廻向に齟齬しつつありしものが、一たび大慈大悲の如來廻向を蒙るや否や、人生忽ちに方向變換して、盡十方無碍光に攝取せらるゝ有様は偉大とも、絶大とも、不思議とも言語を以て言ひ顯はすことは出來ぬ。此大光景は此如來廻向の一語によりて遺憾なく味ふことが出来る。親鸞聖人が教行信證の劈頭に如來廻向を以て筆を起したまひしは實は空前絶後の大德音である。抑々如來廻向といへることは佛教普通の用語より言へば頗る破格なる造語である、何んとならば、廻向といふことは我等が爲すところのものを他に廻らし向くことである、然るに

如來廻向といふは方向が一變して、如來が我等に向て如來の爲したまひしものを廻らし向けたまふこととなる、抑々言語文字の上に破格なる事の起るのとは、思想其物に於て破格なる點があるからである、而して宗教に於ては破格なる思想といふことは畢竟破格なる實驗の結果である、もつと推しつめて言へば破格なる事實の顯現である、抑々親鸞聖人が、かくの如き如來廻向といふ破格なる造語を爲したまひし所以のものは、人生に實に如來本願力廻向といふ一大事實があるからである、夫を聖人が實驗したる結果が思想となり、文字となりて、他力信仰の根本的起點となつたのである。トルストイが信仰の實驗を形容して、恰も人が道を往きつゝある時に、突然用事を思ひ出すことありて踵を廻らして其道を歸り來るときは、同様の道でありながら光景は一變して、前にありしものは後となり、後にありしものは前となり、右にありしものは左に在り、左にありしものは右に在り、同一の道でありながら其方向が全く正反對となるといふことを言ふてある、實に親鸞聖人の他力眞宗に於て廻向といふことを根本的に方角を變換せられたのが是の如きものである、從來の自力主義にては我等が善を行ひ、功德を修することにより

でのみ光明を見出し得べし、我等が心を靜かにし、妄念を拂ふことによりてのみ自覺に達し得べしとのみ考ふる自力廻向であつたのである。然るに親鸞聖人は如來の大慈大悲が我等に恵を廻らしてさし向けたまふことに氣附かるゝや否や、從來の自力廻向の方角は一變して、如來廻向の絕對他力眞宗の大道は開け來つたのである。

抑々如來廻向といふことの源は、法然上人が念佛は不廻向と言はれたのが根本である、其意味は南無即ち歸命といふ言に發願廻向の意義がある故に、特に廻向の文句はいらぬ、故に不廻向であると言はれた、偕其歸命に發願廻向の意義がある云ふを親鸞聖人は、如來が發願して我等に廻向したまへるの意義であると宣ふ、即ち南無阿彌陀佛は、我等の廻向にあらずして、如來の廻向であると絕對他力の大慈悲が顯現したのである、法然聖人が念佛は不廻向であると申されたは、從來自力廻向の方向を取りて進みつゝありし行者に對して氣を附けられた警告である、此警告によりて全く方向轉換をして來つたのが如來廻向である、一步進めて言へばたとへは汽車が西に向て進みつゝある時何時ともなく東行とのみ誤想することがある、其時は窓外の凡てを反對の方角に誤想して居る、

是れ、如來廻向の大事實を誤想して、自力廻向のみに心を注いで居る様なものである、然るに窓外何か一點氣がつきて是は東行ではないと分かるなり、忽ち全體の方角ががらりと一變して堂々西行の汽車の外何物もない、法然上人が一世舉て自力廻向の方角に諸善萬行を勵みつゝある時、念佛は不廻向であると申されたは、東行の方角と心得て窓外の凡てを誤想せるとき其一點を東行でないといふ氣を附けて下されたのである、其一點の方向變換は直ちに全體の方向變換である、五濁惡世の有情の、選擇本願信すれば、不可稱不可說不可思議の功德は行者の身にみたり、其の念佛の中には萬善萬行恒沙の功德のすべてが籠つてある、人生如來廻向已外のものはない、他力已外に自力の存在を許さない、一たび氣附き見れば自力廻向の東行と見たは根本的の誤想にして、堂々西行の如來本願力廻向の絕對他力の外はない、是親鸞聖人の眞宗の根本である否、佛教の眞實を實驗せられた眼目にして、佛教全體の方向轉換を生じ來つたのである、否人生の眞方角が発見せられ十方衆生が初めて大悲本願の御親に遇ひたてまつたのである、故に如來廻向の一語は如來清淨願心の中心を開き來つた鍵である、現在吾人の上に無限の大悲の下りつゝある大光景である

る、『如來の作願をたづねれば、苦惱の有情をすてずして、廻向を主としたまひて、大悲心をは成就せり、』是實に親鸞聖人が如來の廻向の源泉である。

さて其如來廻向は親しく聖人が頂きたまひし賜である、そして此賜は實に十方衆生に對する御賜たることを示し下されたが聖人の御教化である、教行信證も畢竟之に過ぎない、そこで和讃に簡潔に之を示したまひて曰く、『彌陀の廻向成就して、往相還相ふたつなり、これらの廻向によりてこそ、心行ともにえしむなれ。往相の廻向とてくことは、彌陀の方便とさいたり、悲願の信行えしむれば、生死すなはち涅槃なり。還相の廻向とてくことは、利他教化の果をえしめ、すなはち諸有に廻入して、普賢の徳を修するなり。』とある、往相還相の廻向は實に聖人が人生に對する光明である、信界に於ける實驗である、佛教全體に對する斷案である、三世十方を貫ける衆生救済の大事實である。

「彌陀の廻向成就して、往相還相ふたつなり」とは、即ち此衆生救済の大事實である、我等を淨土に往生せしめて涅槃の極果を得せしめ、又淨土より還來して自在に衆生濟度せしめたまふ如來の廻向である、而して聖人親しく其廻向を蒙られた

結果が即ちこれらの廻向によりてこそ、心行ともにえしむなれ』である、しかれば聖人は明らかに如來二種の廻向に面り遇ひたてまつりて信心決定せられたのである、他の和讃に『往相還相の廻向に、まうあはぬ身となりてせば、流轉輪廻もきはもなし、苦海の沈淪いかせん』など、いかにも此二種の廻向を親しく受けたまひし實感を見るべきである、抑々聖人十九歳磯長太子の靈告によりて求道心を促され、二十九歳六角堂の靈告を蒙りて法然上人に遇ひたまひて信樂を獲得したまひし次第、全く還相大士の御導きによりて如來大悲の往相廻向の御恵に引き入れられたまひたのである、されば聖德太子讃にも『聖德皇のおあはれみに、護持養育たへずして、如來二種の廻向にすゝめいれしめあはします』とある、これ實に『これらの廻向によりてこそ心行ともにえしむなれ』と宣ふ所以である。

此の如く聖人が親しく蒙りたまひし往相還相の廻向のありさまを一々味ひ來るに『往相の廻向とてくことは彌陀の方便とさいたり、悲願の心行えしむれば、生死すなはち涅槃なり』前號の社説にも云ふたが、『彌陀の方便とさいたり』の一語は實に人生の上に光明を持來したる御言である、聖人十九歳已

來常に求めて止むときなく、遂に時機到りて二十九歳法然上人に遇ひたまひたのである。『諸佛方便と云いたり、源空ひじりとしめしつゝ、無上の信心あしへてぞ、涅槃のかどをばひらさける』は正に此往相廻向の有様を全く自己身上につきて示されたのである。勿體往相廻向と還相廻向とを分つて受くるのではない、現に此「方便と云いたり」の文字も畢竟還相の大士あらはれて善巧方便したまふことである、こは後に述ぶるとして、往相廻向としては悲願の心行が肝要である、而して其心行を得れば「生死すなはち涅槃」の極果を得るのである、故に聖人は「謹て往相の廻向を案するに大信あり大行あり」とか「往相廻向の心行を得れば即時に大乘正定之聚に入る」とか宣ふ、即ち法然上人に遇ひたてまつり、本願を信受したまふ一念に即得往生の菩薩となりたまひし實驗である、特に略文類に「薄地の凡愚、底下の群生、信樂獲難く極果證し難し、何を以ての故に、往相の廻向によらざるか故に、疑網に纏縛せらるゝが故に」と仰せられし如きは、いかにも此往相廻向によらずしては信心起らず、念佛も稱ふることの出来ぬことを示したまひたのである、其心行の結果が生死即ち涅槃である、是往相廻向の極である。

土門は飽まで彼土を目的とするものなれば此土は穢土である、其穢土中に普賢大士の徳があらはれたまふことは有形無形此人生を意義あらしむるものである、一生之間能莊嚴などいへる理想界を人生に認むることの出来るのは「自ら莊嚴して普く一切衆生を度脱せんと欲す」といふ還相廻向の成就によりて「現前に普賢の徳を修習し」たまふ事實である。

親鸞聖人行卷一乗海の自釋に勝鬘經を用ゐたまふと、蓋し皇太子の旧域大乘相應地の靈告によりて、本願一乘に遇ひたまひしを暗示するものであらう、是嘗て本年三四月號に詳論せしところである、而して今某師の説に其次に涅槃經を引きたまふは是「生死すなはち涅槃」の意にして眞實證であらう、而して其次に華嚴經を引きたまふは是「普賢の徳にして、還相回向であらう、若し普通の順序ならば華嚴を先にして涅槃を後にする筈なるに、是れ往相還相を示されたるものであらう、故に結文に爾れは斯等の覺悟は皆以て安養淨刹の大利、佛願難思の至徳也とある、如何にも適切なる説にして、釋尊一代の説教も畢竟往相還相の外はない、而して釋尊夫自身が還相の外はない、八相成道より華嚴の説法が即ち普賢大士の徳である、而して最後の涅槃は即ち極樂無爲涅槃界に歸りたまひた

其往相廻向の極まりが還相廻向に移るのである。『還相の廻向と云ふことは、利他教化の果をえしめ、すなはち諸有に廻入して、普賢の徳を修するなり、還相の廻向は自身として勿論涅槃に入りて實現することを得る利益である、されど我等が正しく還相大士の導を受くる場合は寧ろ入信の前後に涉りて大悲の恵と共に常に絶ゆることはない、夫故に前に言ひし彌陀諸佛の善巧方便によりて導かるゝのが即ち是である、信卷別序に「眞心を開闡することは大聖於哀の善巧より顯彰せり」とあるが如き、又總序にある調達闍世の逆害韋提獄中の獲信の如き、即和讃に「大聖の〴〵もろとも、凡愚底下のつみひとを、逆惡もらさぬ誓願に、方便引入せしめけり」とあるは皆還相大士の徳である、さればこそ略文類には還相廻向に引續きて同様の文が擧である、加之聖人が私淑したまひし天親論主曇鸞宗師を擧げ來りて結びて曰く、聖權の化益偏く一切の凡愚を利せんが爲なり、廣大の心行唯逆惡闍提を引かんと欲してなりとある。かくの如くして我等を信仰に引き入れしのみならず、又信仰生活中に入り來りて人生を莊嚴したまふのである、聖人が家庭的生活の如きも、流罪傳道の如きも皆還相大士の導きたることを感謝したまひたのである、淨

のである、かく考へ來れば大無量壽經序分一時來會の聖衆までが皆普賢大士の徳に遵ひ、八相成道して、佛の華嚴三昧に入りたまひし還相の大士であることが大に明らかになつて來る、かくて一代經夫自身が如來二種廻向の外はない、「如來世に出興したまふ所以は唯彌陀の本願海を説かんとなり」といふも、釋尊が「我五濁惡世に於て此難事を行して阿耨多羅三藐三菩提を得る」といふも、又聖人が「三世十方の如來出世の正しき本意は唯阿彌陀の不可思議願を説くとなり」と宣ふも、畢竟本願力廻向の還相往相を示すの外はない。洵に是れ「前に生れたるものは後を導き、後に生れたるものは前を訪ひ、連續無窮にして願くは休止せざらしめん、無邊の生死海を盡さんが爲めの故」である。

是當に釋尊につきてのみ言はるゝ事でない、一切の往生人につきて言はるゝことである、「安樂淨土にいたるひと、五濁惡世にかへりては、釋迦牟尼佛のごとくにて、利益衆生はきほなし」である、聖人が「一人して喜ばし二人と思ふへし二人して喜ばし三人と思ふべし、其一人は親鸞なり」と宣ふ如く、生々世々の父母兄弟の住生人皆我等を結縁引接したまふのである、「釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、わ

れらか無上の信心を、發起せしめたまひけり。畢竟我等が如來慈親の下に、重愛を蒙る眞子としての、大自覺を生ずる信の一と與へたまはんだためである。一たび其自覺を得れば、四海兄弟である、人生は如來慈父慈母の下に集るべき同一念佛の同朋である、而して面り其佛の下に團欒する家庭が淨土である、而して有縁の兄弟を呼ぶべく人生の藺林に遊戲するのが普賢の德である、して見れば此人生は往相還相の廻向が各個人に向つてしばらくも止むとさなく働きて下さる莊嚴光の充ち満つる世界である。「慈光はるかにかみらしめ、ひかりのいたるところには、法喜をうとぞのべたまふ、大安慰を歸命せよ。觀音勢至もろともに、慈光世界を照耀し、有縁を度してしばらくも、休息あることなかりけり。」南無阿彌陀佛。

十方の諸佛方が、自國の菩薩に對し、彌陀の淨土にすみやかに至るべし。はやく至れよ、能く勝る、彌陀の淨土ゆへに、早く到れよ、うる／＼して居らずとも、速かに彌陀の佛國に往生せよとのたまふ。釋迦の此の世に御出現もこのためなり。速疾超便とせき立て下さるなり。

〔香月院雜錄〕

感謝

一年の回顧

本年の求道は「眞諦の信仰を以て世諦を經營せよ」に筆を起し、信仰問題の根柢に入り、「絕對純一の信仰」を論じ、「如來」に根本を見出し、「本願」「信樂」「念佛」順次信仰の要義を味ひ來りて人生に出て來り、「人生唯如來を信ぜよ」「如來を信ぜずしては人生何事も成るものなし」と斷じ、「如來は無碍也」「如來の加威力」を讃仰し奉り、最後に悉くこれ「如來の廻向」なることを感謝稱揚し奉りて筆を止めぬ、吾人必しも深く意を用ゐたるにあらざるも人生より信仰に入りて、究竟に如來を見出し、人生悉く盡十方無碍光如來の廻向を蒙らざるはなきに至る、吾人終世の事業は此如來二種の廻向を稱讃し奉るの外なき也。和讃に曰く、

他力の信をえんひとは

佛恩報せんためにとて

如來二種の廻向を

十方にひとしくひろむへし

歳末の感謝

萬木葉落ちて風蕭颯、天雪意を含みて地亦凍らんとす、乾坤納々として年暮れんとし、人間勿々として心轉々忙し、情々聖教に對して聖人化導の昔を偲ぶ、聖人越後配所に在すと五年、勅免ありと雖、猶信越の雪を踐み野常の曠原にさまよひたまふこと二十餘年、其諄々として倦まず、懇々として誨へたまふを想ふごとに、聖人の風手宛として吾人の前に在すが如し、吾人は歳暮に遇ふ毎に自己の身を顧みて常に聖人の御苦勞を感謝し奉らずんばあらず、余や正に三十九を送らんとす、恰も是れ聖人勅免の齡に當る、而して居常山嶽の洪恩を蒙りて未だ涓滴だも恩に報ゐず、而して聖人が風雨五年の謫居を終へて、芒鞋竹杖往く／＼東國を化したまひし當年を回想し奉るに無慚無愧言の出づる所を知らず、而して其間二十有餘年の長きに涉れるを思へば其間に於ける千艱萬難吾人は殆んど想像する能はざる也、亦何ぞ近川を歎せん、空く我等凡愚聖人の冥加を賜はりて大願海に入り今日の生息を得る分の幸也、憶ふて此に至れば恩德の深廣なるに感泣せずんば

あらず、冀くは粉骨擢身以て聖人御苦勞が大海の一滯を報恩し奉らんことを。

感慨と感謝

古來世人は歳暮に遇ふ毎に感慨頻也、これ人生の成績を擧ぐるあたはざるを歎けば也、信仰の人は歳暮に當りて寧ろ感謝也、年々歳々光明中に生活する洪恩を感ずれば也、寧ろ罪深き我等がよく／＼護持養育を蒙ることを思へば也、我生來感慨を好み、年少歳晩の詩作あり、而して今や將に初老に入らんとして却て老の到るを悲まず、過去の行跡を回想して冥護の恩澤に感謝せずんばあらず、唯年空く老いて、益々我身の罪業の深きこと慚愧に堪へざる也。



講 話

攝取の心光

(求道學舎日曜講話)

近 角 常 觀

今日の題は『攝取の心光』であります。攝取といふのは言ふ迄もなく攝取不捨の味の事で、即ち我々が如來の廣大なる光明の中に入らせて貰ふ有様である。今日は此事に就きて少しお話を致さうと思ひます。

攝取不捨の言は、もと『觀經』の言葉から示し下されたもので、『觀經』の中に「光明徧照十方世界念佛衆生攝取不捨」といふ御文があります。此攝取不捨の言を親鸞聖人は深くお喜びあらせられて、我々が信の一念に佛の光明を心の内に頂いて、心底より安心する有様であると示し下された。又聖人の言葉の上には「攝取不捨の故に正定聚に住す」といふ御文もあつて、我々が一度び廣大なるお恵みの中に入らせて貰へば、正定聚といつて再びあとへ戻らぬ境界に入らせて貰ふ事の出来るのは、攝取不捨のお力の故であると喜んでお出になります、が之はいかに有難いお言葉である。殊に此頃私は自分自身の心が如何に平安なのを自分から眺めて、能く

頂いて見るに、實に此の御言葉を有難く思ひます。豫ても申した如く親鸞聖人はこの攝取不捨の言を『阿彌陀經』の御言葉と一緒にして、我々が如來の慈悲に遇ひ、如來の光明中に納められる味を『和讃』に示し下された。之はもと善導大師の御言葉によられたのであるが、

十方微塵世界の、念佛の衆生をみそなはし、

攝取してすてざれば、阿彌陀となづけたてまつる。

抑我々が阿彌陀佛といひ、佛と呼び奉るのは何か。今いふ攝取の光明中に納め取つて捨て、下さらぬ方なればこそ、阿彌陀佛といひ、佛と申し奉るのである。言葉は簡單であるが、實に難有い御和讃であります。總て信仰上の事は、言葉は少くても實地に氣が就けば、一首の和讃で充分なのである。十方微塵世界、十方に有りとある澤山なる世界の上に、佛は常に御覽下されてある。いつもいふ如く、今互が斯うやつて喜んで居る有様を佛は直に御覽下されてあるのです。而して「攝取してすてざれば」御恩に氣の就く一念に、光の中に納め取り、慈悲の中に納め入れて攝取して捨て、下さらぬ、設ひ我々が慈悲の外に出ようと思つても、出る事の出来ぬやうに抱えて下さるのである。斯の如き廣大なるお恵みなればこそ阿彌陀と名け奉るのである。阿彌陀佛とは此の廣大なる慈悲の中に納め取りて捨て、下さらぬお光であると、實に有難き和讃であります。

毎に申す事であるが、今日も順序として慈悲に氣の就く道筋から申します。抑我々が此の佛の廣大なる慈悲のお光に照らされ奉つたのは、昨今の事では無い。十劫以來此の佛の

廣大なるお光に照されて居るのである。佛の廣大なる慈悲から御覽下さる時は、我々は昔より此の廣大なるお恵みの中にありながら御恩を御恩と知らずに居るものである。然るに佛は我々が御恩を御恩と知らずに居る有様を御覽下されて、昔より大慈の御心を以て我々に臨んで下されてある。て我々は抑々此世に於て色々とお心配したり、色々とお計つたり、色々苦勞したりして居るのであるが、結局之れ皆な此の廣大なるお照し、此の佛の慈悲を知らぬからである。お互が此世の中に於て何事を心配するにせよ、苦勞するにせよ、或は又斯くせねばならぬと力んだり、思ふやうにならぬと悲むにせよ、皆なこの廣大のお慈悲に氣が附かぬからであります。解り易く申しますと、抑佛の慈悲とは何であるか。といふに斯の如き諸の罪深きもの、惱み多き者、諸の行の出来ざる者、惡心の止まぬ者に對して、無限の情けを以て向つて下され、我々の如何に淺間しきをも見捨てぬとあるが佛の心である。『觀經』の中には「佛心者大慈悲是也」といふ御文も有つて、佛が夫程廣大なるお光りて照して下さるといふも、廣大なるお心で向つて下さるといふも、結局此の佛陀大悲の心光に外ならぬのである。もと／＼十方衆生生きとし生ける者其者々々に向つて一人々々に慈悲の溢れるお心で向つて下さるが佛の大悲心であります。

猶ほ解かり易く申しますと、抑我々は何故世の中の事に心配するのであるか。つまり世の中が思ふやうにならぬとか、自分が思ふやうに出来ぬとか言つて苦しんで居るのである。我々が實際に苦む場合には色々あらうが、要するに皆之であ

ります。處が我々が始より世の中が思ふやうになると思ひ、自分が思ふやうに出来ると思つて居るのが大間違ひで、實際にさうはならぬ。處が我々が其思ふやうにならぬ、思ふやうに出来ぬもの故に、其者を哀れんで願はれ下された御慈悲の塊が佛なのである。大分話が色々になりますが、凡て佛法を頂くには茲が肝心であります。全體我々が佛のお慈悲を聞く迄は、佛を無いものにして世の中を考へるから、自分の思ふやうになり、自分の思ふ如く出来ると思ふて居るのである。私始めさう思ふて居たのであります。思ふやうになり、思ふやうに出来るといふ考は、細かく分ければ色々の場合に言へるが、要するに人間の計ひは此の外に出てぬのである。我々が日常生活の上に就きて考へて見ても或は世に神もない佛もないと言つて苦み、或は名譽財産位置に就きて苦み、或は又道徳が善く出来るとか出来ぬとか、他人に盡くせるとか盡せぬとか、人を善く思へるとか思へぬとか、色々々の事を胸中に考へて苦しむて居るのである。或は又自分の身體を頼りにして居るもの故に死ぬ時になつて色々心配する。斯の如く何から何迄、生れてより死ぬ迄種々無量の事を心配して居るのであるが、是れ皆自分の思ふやうになり、思ふやうに出来ると考へて居るからであります。而して夫等のものが眞に思ふやうに出来るかといふに、思ふやうに出来るものは一も無い。又夫が思ふやうになり、思ふやうに出来る位ならば、初めから佛のお恵は入らぬのであります。抑佛の大悲の源は、我々が思ふやうにならず思ふやうに出来ぬ者故に、其處を哀れみ我々の爲に御苦勞下されたのである。即ち「歎

異鈔』の中に、

煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのことみなもて
そらごと、たはごと、まことあることなきに、たゞ念佛の
みぞまことにておはしますところおほせはさふらひしか。
とあるが之れてあります。抑我々は煩惱具足の體である。此
の世は一として當てにならぬ火宅無常の世界である。此の煩
惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづの事皆以てそらご
と、たはごと、まことの物とては一つも無い、其まこと無き
人生を當てにし、頼りにして、出來ぬ事を仕度いゝと躁い
て居るのが、一口に言う人問である。之が人生の闇み、無
明の有様であります。

抑佛は何故に現はれ給ひしかと言ふに、廣大の慈悲心から
此の闇黒無明の世の中を哀れみましゝて、衆生の爲に此の
無明を取り退けて遣り度いといふ思召から、茲に佛の慈悲が
出て來つたのであります。之を『和讃』には、

無明の大夜をあはれみて、

法身の光輪きはもなく、

無碍光佛としめしてぞ、

安養界に影現する。

と示し下された。即ち人生の無明の大夜を哀れみて、法身
の光輪極はも無く、茲に無碍光佛の彌陀如來が現はれ給ひた
のである。無碍光佛とは人生の何物にも支へられず闇を照し
給ふ御光といふ事でありす。先日も監獄に參つて『歎異鈔』
の念佛無碍の一道に就いて話した時にも申した事でありす
が、無碍はさへられぬといふ事である。支へられぬとは、我

々は人に善くしても人が受けて呉れず、人に親切にしても人
が感じ無い時には、我々の親切心は直ぐに消え、直ぐに醒め
て仕舞ふ。之は無碍でなく、大にさへられるのである。即ち
我々の心は皆な有碍であります。無碍とは何うかといふに對
手が如何に淺間しくとも、如何に惡しくとも、淺間しければ
淺間しきにつけ、惡しければ惡しきに就け、彌々捨てられ無
い心が無碍である。親の慈愛は子供が惡しければ惡しき程彌
々重い。是れ支へられぬからである、無碍であるからであ
ります。今此の當てにならぬ人生に於て、佛の御光は我々が如
何に煩惱熾盛でも、如何に罪惡深重でも少も夫等に碍りなく
照らして下さる。此方が佛に背けば背く程彌々之を哀れんて
下さる、此方が淺間しければ淺間しき程彌々佛の慈悲心は高
まつて下さる。佛は此の廣大なる無碍大悲の心光から常に
我々を照して居て下さるのであります。之を又『和讃』には

盡十方の無碍光は、

无明のやみをてらしつゝ、

一念歡喜するひとを

かならず滅度にいたらしむ。

此の無碍の御光明は盡十方を照らして邊際がない。其の盡十
方無碍の光明は何を照らし下さるのかといふに、即ち人生の
無明の闇みを照らし下さるのであります。佛の光明といひ、
佛の本願といふも人生の何事でも連も夜の明けぬ闇を照らし
て下さるといふ肝心の點を聞かねば、聞く處はないのであり
ます。之を又本願といふ上より言ふ時は『和讃』に

如來の作願をたづねれば、

苦惱の有情をすてずして、

廻向を首としたまひて、

大悲心をば成就せり。

我々は此の當てにならぬ世の中を當てにしたり、出來ぬ事を
仕やうと考へて、種々苦惱を重ねて居るのである。爾るに佛
は此の苦惱の有情を哀れみ捨てずして、廣大なる本願を起
し、廻向を首とし給ひて大悲心をば御成就下されたのである。
即ち佛陀が我々衆生の苦惱の有様を見るに見兼ねて、お起し
下された廣大なる御親心の塊が本願である。是れ實に佛陀大
悲の大本とてあります。

で全體我々が自分の力で思ふやうに出來たり、思ふやうに
仕たりする事を得る位ならば、佛が此の世に現はれて下さる
事は入らぬのである。甚だ極端な言ひ方ではあるが、切り詰
めて申せば若し佛陀が現はれて下さら無つたら、我々は如何
にするも現世にとる可き道は無いのであります。今日世人は
此の佛陀ある事を知らずして、唯徒に世の中が思ふやうにな
らぬと苦んで居る。之は寧ろ世の中は苦しいのが當然で、本
來人生は苦惱の舊里、闇黒の世界なのである。何處に一點光
明の無いのが、寧ろ人生の真相なのであります。爾るに其處
を哀れんで現はれ給ひし慈悲の塊が佛陀である。其の佛の
御心、思召は如何。即ち彌陀の本願である。其の佛の御姿
は如何。即ち盡十方無碍の御光である。其の佛の御名前は如何。
即ち南無阿彌陀佛である。其の佛の我々に向はせらるゝ態度は
如何。即ち如來の廻向であります。要するに何れより言ふも、
此の世は佛の慈悲にあらずんば眞に安心する事は出來ぬの

である。而して其處が今實に我々の聞き處であります。

二

只今も申すが如く、如來の本願とは何であるか。といふに、
昨年來選擇本願の事は度々申したのでありますが、我々は立
派なる行ひとは何一つ出來ず、修行も出來ず、戒行も持て
ぬ者である。乃至極端に言へば我々は世間の親孝行も出來
ず、又人に親切一つ出來ぬ人間である。自分が既に出來ぬと
すれば、又人が出來る筈も無い。人間界が實に斯の如き有様
である故に、此の淺間しき有様を御覽下されて、此の修行の
出來ず實行の出來ぬ者の爲に、此者を見捨てずに御成就下さ
れたのが本願であります。即ち「見捨てぬ」とあるが、如來
本願の精神である。如何に見捨て給はぬか。即ち我が南無阿
彌陀佛の名號を衆生に知らせ、衆生の胸に届けて、之に氣の
就く一念に攝取して捨てぬとある彌陀の本願である。之を解
り易く我々の方より言ふ時は、「世の中は當てにならぬ、眞に
頼むべきは唯南無阿彌陀佛のおまこと一つである」と、氣の
附く一念が、即ち此本願の謂はれを頂いた時であり、南無阿
彌陀佛の謂はれを頂いた時である。先き程より言ふ如來が此
の世に現はれて下された思召しと言ふのも、結局此の本願南
無阿彌陀佛の謂はれに外ならぬのであります。

大分話が細かくなりますが、どの方面より言つても我々は
信心を頂く外に助かる道は無い。今日世人は信心の無い日暮
しが當り前て、信心を頂くのが何か特別の事のやうに考へて
居る。之は大きな誤りであります。如來の本願の上より言ふ

時は、信心を頂くのが人間の當り前で、如來のお慈悲を外に
して安心しよう／＼と仕て居るのが無理である。人生安心の
道は唯如來の慈悲あるのみ。之によらずして人間安心の出來
る筈は決して無いのである。昨日も九段の講話で申した事て
ありますが、我々が『歎異鈔』を毎に拜讀して喜ぶも茲であ
る。殊に第二章の御文が有り難い。

親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらす
べしと、よきひとのおほせをかうりて信ずるほかに別の
子細なきなり。云云。

此の「たゞ」の一字が今いふ人生念佛ばかりといふ味はひてあ
る。外に間に合ふものは一もない、唯如來のお恵みのみなる
故「たゞ」であります。世の中に眞に安心し、眞に頼りとなつ
て下さるものは、頼りとなると言ふも甚だ物足らぬ言ひ
方ではあるが——我を捨て給はぬ佛のお恵み、如來のお慈悲、
唯是れ一つである。此の「たゞ」のお言葉が實に有難いのであ
る。法然上人が御一代の選擇本願念佛の御教化も、畢竟此の
「たゞ」の一言に外ならぬのであります。といふは何うかとい
ふに、阿彌陀佛の本願は、我々に戒を持てよとあるては無い、
行をせよとあるては無い、諸の惡心を止めよと仰せられるの
ては無い、乃至我々が斯く／＼する事によつて助けるのじや
ない、唯本願の南無阿彌陀佛を稱へるばかりである、といふ
が法然上人の選擇本願の御教化である。撰集して頂く時は、
抑如來が本願をお建て下さる時に、二百一十億の諸佛の淨土
の有様を御覽下された。中には戒行で以て生れる淨土もあ
る。修行の力で往生する淨土もある。或は布施忍辱等の六度

を以て往生の行とする淨土もある。其他種々無量の行がある
が、阿彌陀如來は其中で、唯南無阿彌陀佛の一つを以て我が
淨土に迎へ取るとお誓ひ下されたのである。斯く念佛の一つ
を撰集して下さる所以のものは、抑の初めに於て佛が
我々の有様を御覽下されるに、到底善根修行で助かる我々では
無い。否自分の力としては親孝行一つ出來ざるのみならず、
日夜無明の罪業を犯しつゝある我々である。ぢやによつても
と／＼此の我々を哀れみてお建て下された本願故に、余行余
善は選ひ棄て、唯專修念佛を以て往生の行とするとお誓ひ下
されたのである。故に此の本願を頂いて唯念佛ばかりと示
し下されたのが今の「たゞ念佛して彌陀に助けられ参らすべ
し」のたゞであります。實に我々は此の唯一念佛のお慈悲己
外に安んずる道は無いのである。又先程申した文であるが、
同じ『歎異鈔』の御文には「煩惱具足の凡夫火宅無常の世界
は、よろづのことみなもてそらごと、たはごと、まことある
ことなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはします」とある。
此のたゞも同じお慈悲の言葉であります。

色々話が六かしくなりますが、どうも親鸞聖人の『教行信
證』中に書かれたるお言葉と、法然上人の『選擇集』中の御文
とが、文字は違ふが皆な同じお慈悲である事が有難い。法然
上人が「たゞ念佛ばかりである、外は何も入らぬ、否入つて
も外の事は出來ぬ我々である故に、出來ぬものは選ひ捨て
其の者の爲めに御成就下された唯一の念佛である」と仰せ下
さる。此の御教化を承はると、初めより我々が他の事が思ふ
やうに出來ると思ふて居るのが、根本的の誤りである。抑他

の世間の事では我々は駄目なる故に、佛が顯はれて下された
のである。若し我々に他の事が出來る位なら、念佛などは仰
せられぬのである。其處で此の廣大なる御恵みを承はつて見
れば、唯念佛ばかりと頂くより外は無いのであります。而し
て此の唯一念佛のお恵みであれば、我々が色々世間の他の事
を當てにしたり、自分で何か出來る如く思ふて居るのも間違
ひであるが、又自分を卑下して仕方の無い者である、罪の深
い者であると徒に歎き悲むのも間違ひである。佛の本願は唯
一念佛のお恵みであつて、此方の罪の有る無しや、此等の善
惡の如何に係はらぬ。善くも悪くも我々は此のお恵みによる
外に仕方の無い者である。其處で親鸞聖人は法然上人の此の
選擇本願のお謂はれを『信卷』には次の如くお示し下され
た。

凡そ大信海を按ずれば、貴賤縋素を簡はず、男女老少を謂
はず、造罪の多少を問はず、修行の久近を論ぜず、行に非ず、
善に非ず、頓に非ず、漸に非ず、定に非ず、散に非ず、正觀に
非ず、邪觀に非ず、有念に非ず、無念に非ず、尋常に非ず、臨
終に非ず、多念に非ず、一念に非ず、唯是れ不可思議不可稱
不可說の信樂なり。喩へば阿伽藥の能く一切の毒を滅する
が如し。如來誓願の藥は能く智愚の毒を滅するなり。

此御文は法然上人とは言葉は違ふが、畢竟選擇本願と同意で
ある、布施持戒乃至孝養父母等の出來ぬものゝ爲である故貴
賤縋素男女老少を簡はず。其等の者の爲の念佛一行である
故に「唯是れ不可思議不可稱不可說の信樂なり」である。『歎異
鈔』の初の彌陀の本願には老少善惡の人を簡はず唯信心を

要とするべしとあるも全く同意であります。我々が佛の
恵みを頂くのは外では無い、此の苦惱の有様を哀れんで下
さるといふ此のお慈悲一つで頂くのである。此のお慈悲一つ
を頂くには貴族賤民在家出家の區別は無い。又「男女老少を謂
はず」で男であらうが女であらうが、老人であらうが小供であ
らうが、そんな事には關係せぬ。又「造罪の多少を問はず」で、
我々が信仰を頂くには、中には世の中の災難が御縁で信仰に
入る者もある。又色々自分の罪の深いのを心配し信仰に入る
者もある。罪の有る無しに係はらず、唯恵み一つに安心させて
貰ふのである。寧ろ罪が深ければ深きだけ、彌々お恵を喜ば
せて貰ふのである。故に造罪の多少には係はらぬ。又「修行
の久近を論ぜず」で、修行したから頂くのでも無く、修行
が足らぬから頂くのでも無い。修行の長短に係はらずお慈
悲一つで頂くのである。又「行に非ず、善に非ず」唯お恵み
ばかり故、此方の修行や善惡に關係せぬ。又信仰は一瞬間に
頓入するとか漸次に入るとかいふも間違ひである。唯お慈悲を
頂く一つである。又心靜に靜觀冥想して頂く信仰でも無いか
ら、定でもなく、夫かと言つて散善の實行が間に合ふても無き
故、散でも無い。又此方の觀念思索の正邪が役立つても無け
れば、有念といふも非、無念といふも非である。又平素尋常の
時に必ずしも頂くので無く、臨終一念の時に頂くのとも限
らぬ。又一念でなければならぬと云ふも、十念と執するも、夫
かと言つて多念を主張するも誤である。唯是れ、我々の罪深
きをも飽迄見捨てぬとある廣大のお慈悲一つである。而も又
此のお慈悲に氣が就くは此方からか、といふに然うでない、

向ふ様の長さ御照しによつて遂に疑ひ度くも疑へぬやうにして下さるのである。故に此方の如何は總て關係無し、唯是れ不可稱不可説不可思議の信樂である。我々は外に仕方無き者なれども、唯此のお恵みばかりで安心させて貰ふのであります。而して其の廣大なお恵みを頂いた心持は、即ち「たゞ念佛して彌陀に助けられ参らすべし」と、よき人の仰せを蒙りて信するほかに別の仔細なきなりである。此の慈悲ばかりを頂くの故「たゞ念佛して」であります。

偕て段々述ぶる如く我々が善き人の仰を蒙りて、唯念佛して彌陀に助けられ参らすなりと氣の附いた一念が攝取不捨であります。攝取不捨とは世に在る人間誰でも攝取して下されてあるのか、といふに佛は攝取せんと待ち構へたまふに此方は遁げて居たのである。初めにも申した如く、如來は昔より廣大な恵みを差向けて、此の恵みにあらずば安心は出来ぬぞ／＼と我々に向つて下さるのである。其のお恵みは十劫以來のお恵みなれども、我々が之に氣が附かぬ。氣が附かぬ故に如來は、早く氣が附かぬか、今氣が附かぬかと我々に向つて下さる。けれども我々は今迄頂け無つたのであるが、彌陀如來の御催うして、自分が眞に當てになるのでは無い、財産で無い、名譽で無い、位置で無い、又修行や學問が頼みになるので無い、唯如來のお恵み一つであつたと氣の附いた一念に、攝取の光の中に攝取して下さるのである。聖人は和讃に宣はく、

金剛堅固の信心の、
さだまるときをまちえてぞ、

千中無一ときらはるゝ。

設ひ口に南無阿彌陀佛を稱へて居ても、此の世の事を主にし、あゝも仕度い斯うも仕度いと、念佛しながら人生の結果にのみ願慮して居るならば、是れ猶ほ雜念のまじれる者である。即ち雜修の者である。眞にお慈悲を頂いた者なら、即ちお恵みばかりと氣が附いたのであるから、此の心には雜り物が無い。

今日は大分際立て、申しましたが、全體佛教の味ひが茲に在る。茲を頂かねば眞の佛教の味はひは頂かれぬのであります。大聖釋尊は御出家の時、自分の家を捨て位を捨て國を捨て、有りとある人生上の凡てを捨て、親を捨て、妻を捨て、子を捨て、御修行なされた。其の釋尊は最後に何て安心せられたかといふに、廣大なる涅槃の味はひ一つで安心せられたのである。唯佛の悟の境界一つで安心なされたのであります。親鸞聖人は善導大師の御文によらせられて和讃に

九十五種世をけがす、

唯佛一道きよくます、

菩提に出到してのみぞ、

火宅の利益は自然なる。

當時印度には九十五種の婆羅教への哲學的教へ始め、隨分色々の教へが有つたが、釋尊にして見れば、此等は一として眞實の安心を與ふるもので無い。唯是れ世を汚がし惑はすのみである。此等の教へて安心が得られるならば、釋尊は佛陀になられる必要は無つたのであるが、何をやられても釋尊には駄目であつた。故に釋尊は凡ての物を抛棄して、涅槃の極果、唯佛

彌陀の心光攝護して、
ながく生死をへだてける。

三

大分話が長くなりますが、茲は餘程氣を附けて頂かねばならませぬ。蓮如上人が「改悔文」に、

もろ／＼の難行難修自力のこゝろをふりすて、一心に阿彌陀如來我等が今度の一大事の後生御たすけ候へとたのみ申して候。

と言はれたも茲であります。諸の難行難修自力の心を振り棄て、といふは、如來のお恵みばかりと氣が附かぬから、自分であゝも爲ねばならぬ、斯うもせねばならぬと難行難修の心が起るのである。如來の御恵みばかりで日暮しさせて貰ふ事を知らぬから、色々と氣を揉んで自力の難行に陥るのである。和讃に宣はく、

こゝろはひとつにあらねども、

難行難修これにたり、

淨土の行にあらねば、

ひとへに難行となづけたり。

難行難修と、細かく別ければ六かしくなるが、「淨土の行にあらねば」即ちお恵み以外の事は、ありとある事、設ひ如何なる事をして要するに是れ難行難修である。

佛號むねと修すれとも、

現世をいのる行者をば、

これも難修となづけてぞ、

一道を得られたのであります。之は佛教の有難い點で、佛教には随分六かしい事もあるが、頂く時には唯此の一つで頂けるのである。釋尊が弟子を教ゆるにも此の一つを以てせられた。我々が彌陀の本願を頂くも亦同様であります。人生のものは凡て當てにならぬ、修行も戒行も智識も學問も安心の道には總て駄目である。たゞ茲に「唯佛一道きよくます」。其の一道とは、親鸞聖人から頂くと、即ち本願の一道であります。

人生頼みになるは唯此の本願の恵みばかりである。此のお恵みを心に氣附く時は、實に是れ唯お慈悲である、お慈悲ばかりである。我々如き罪惡の者を、其者を見捨てず助けて給ふとお慈悲ばかりである。此の廣大なるお慈悲に従ひ「たゞ念佛して彌陀に助けられ参らすべし」との仰のまに／＼頂いた處が、即ち蓮如上人の「もろ／＼の難行難修自力の心をふりすて、一心に阿彌陀如來、我等が今度の一大事の後生御助け候へとたのみ申して候」と仰せられた味はひである。之がたゞお恵み一つと頂いた處であります。處が茲が、唯此の一つと頂けぬ時は、自然に他のものを間に合はしたくなり、從つて雜り物が出来、難行難修に陥るのである。

偕て此の御恵みばかりと頂いた一念の心持は何うか。即ち『歎異鈔』の第一章の

彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて、往生をばとくするなりと信じて、念佛まうさんとあもひたつこゝろのあこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。

とあるが茲であります。攝取不捨の光明といふ時は、我々は

如來が光明を放つて其中に引き入れて下さる様子を想像して、何か神秘的の事のやうに考へる。勿論其の事も有るに違はぬが、併し唯夫れ丈ぢや無い。もとゞ阿彌陀如來の本願の大部分が、我々を此の光明中に納め取らんが爲に顯はれて下されたので、佛は昔より我々の氣の附く時を待ち居て下さるのである。即ち先程申した和讃に「金剛堅固の信心の、定まる時を待ちえてぞ、彌陀の心光攝護して、長く生死を隔てける」とあるが之であります。抑如來の光明は我々が氣の附く時に、初めて我々を照して下さるので無い。我々が氣の附く前より常に我々を照しづめに於て、此の光明の催うして衆生に吾が本願を聴かしめんと言つて、下さるのである。此廣大のお照しあればこそ、我々の淺聞しき胸中にも遂に如來のお慈悲が届いて下さるので、是れ所謂の宿善の御催である。我々は平素何氣なく考へて居れども、此の氣の附く迄の如來の御苦勞が中々一通りて無いのであります。其處で親鸞聖人は光明名號の因縁といふ事を非常にお喜びあらせられて、佛は先づ光明を以て我々を照して、我々に名號の味はひ知らせ、此の光明名號の二つて以て信心を育て上げて下さるのであると言つてお出でになる。之を人生的に言ひますと、我々が慈悲に氣が附く迄は色々人に親切を以て向へども、人が一向満足して呉れぬ、人の事が不足になる。又自分に如何程努力してやつて見ても、何うも思ふやうに行かぬ。右に向いても突き當り、左に向つても行き詰る。之は寧ろ行けぬ筈で、行けぬ人間なるが故に佛は唯念佛の一を以て救ふと言つて下さるのである。其處で最後に、氣が附いて「斯の如き者なれ

ばこそ佛が我々を哀れんで下さるのであつたか」と頂いた一念が信である。之が即ち今彌陀の誓願不思議に助けられ參らせて往生を遂ぐるなりと信じて、念佛申さんと思ひ立つ心の起る時、攝取不捨の利益に預けしめ給ふなり」とある所であります。

茲で注意すべき事は、氣がつくといふは、我々が自分に氣が附くのでは無い。妄念の礙り固りなる我々が、如何程躁いた處が此の廣大なるお恵みに自分から氣の附く筈は無いのである。夫が氣が附くといふは、佛陀が久しき間光明のお照して、種々に善巧方便して我々を茲迄追ひやつて下されたからであります。偕て「念佛申さんと思ひ立つ心のおこる時、攝取不捨の利益に預けしめ給ふなり」とあるは、我々が力みて南無阿彌陀佛と稱へるのでは無い。稱へやうと思ふて稱へるのでは無い。「唯彌陀の誓願不思議に助けられ參らせて往生を遂ぐるのであつたか、あゝ有難い」と氣の附いた一念に思はず識らず南無阿彌陀佛と口に浮んで下さるのである。まだ口に出して稱へずとも、稱へやうと思ふ心の起る一念に、既に慈悲の中に納め取りて攝取不捨の利益に預けしめ給ふのであります。偕て我々が一旦慈悲に眼が醒めた以上、再び此のお慈悲を疑はうと思ふても疑へぬ。即ち納め取つて捨て給はぬのである。是が即ち攝取不捨の御利益である。

夫故攝取不捨といふは、一度佛の光に氣が附けば、此方の方では忘れて居つても、佛が捨て、下さらぬのである。設へ如何に懈怠に暮さうが、如何に煩惱惡業に蔽はれようが、一度佛攝取せられた者が再び迷ふ氣づかひは無い。茲が攝取

不捨の有り難い處である。其處で親鸞聖人は『行卷』に

爾れば眞實の行信を獲る者は、心に歡喜多し、故に之を歡喜地と名く、是を初果に喩ふる事は、初果の聖者尚ほ睡眠、懶墮なれども二十九有に至らず、いかに泥んや十方群生海、斯の行信に歸命すれば攝取して捨てず、故に阿彌陀佛と名く。是を他力と曰ふ。是を以て龍樹大士は即時入必定と曰へり。曇鸞大師は入正定聚之數と曰へり。

と申された。そして其の攝取の光明の中に納め取つて下さるゝ有様を光明名號の因縁で示されたのであります。此の如來の親の懷に抱かれた處が、眞宗の眞宗たる處である。此の親の懷に抱かれた處が眞の佛弟子である。親鸞聖人が眞の一字を以て肝要とし給ふが此の點である。此の眞の教を知らせて下された法然上人である故に、眞の智識と仰せられたのである。『歡喜鈔』に、「親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀に助けられ參らすべし」とよき人の仰を蒙りて信する外に別の子細なきなり」とあるよき人が、即ち眞の智識であります。何故眞の智識であるか、といふに、唯念佛して助かるといふことの恵みを知らせて下された智識である。其の恵も此方から持ちかけて助かるので無く、恵の力で助けられるの故に「助けられ參らすべし」である。何うあつても斯うあつても、佛に助けられて仕舞ふのである。之れが攝取不捨の味はひであります。

斯く助けられて見れば、我々としては何とも仕て見様は無い。浮かばうと沈まうと、唯佛任かせてある。念佛が淨土の種であらうと、又地獄の種であらうと、そんな事に心配は入

らぬのである。設ひ法然上人に欺かれよう、地獄に落ち込

まうと、何にも心配は入らぬのである。此の心持が即ち攝取不捨に預つた言ふに言はれぬ心持であります。『歡喜鈔』の次の御文に

たゞし業報かぎりあることなればいかなる不思議のことにあひ、また煩惱苦痛せめて、正念に住せずしてをばらんに、念佛まうすことかたし。そのあひだのつみはいかにして滅すべきや。つみをえざれば往生はかなふべからざるか。攝取不捨の願をたのみたてまつらば、いかなる不思議ありて罪業をおかし、念佛まうさずしてをばらんとすみやかに往生をとぐべし。

之が佛の光に攝取せられた有様であります。設ひ罪業を犯かさうが、如何に遁げようと思はうが、一度佛の有難い事を頂いた以上は忘れる事も出来ず、遁げる事も出来ぬのが攝取不捨である。『御一代聞書』に或人が雲居寺の阿彌陀如來に攝取不捨の理はりを聞かして頂き度いと祈念をかけた處、如來は袖を捕へて遁がし給はなかつた。蓮如上人は之を引言にして、攝取不捨とは遁る者を離し給はぬ事であると仰せられた。如何にも我等は一度佛如來のお慈悲を頂きながら、又も又も煩惱に蔽はれて遁げようとして居るのである。夫にも係はらず又も慈悲に立ち戻り、又も恵みを思ひ出させて貰ふのが攝取不捨の御利益である。

煩惱にまなこさへられて、

攝取の光明見されども、

大悲ものうきことなくて、

つねに我が身をてらすなり。

忘れがちなのが我々の心である。我々の方は忘れ勝ちでも佛の方では、しばらくも忘れて下さらぬ。我々は常に怠りがちの横着者であるに、佛は少しもものうきことなくして、常に私を忘れて下さらぬのであります。斯く佛のお心に攝取せられた以上は、設ひ慈悲を思ひ出さず、恵みに立ち反る事なくとも、佛は必ず助けて下さるのである。『歎異鈔』に

一切のことにあしたゆうべに廻心して往生をとげふらふべくば、ひとのいのちはいづるいき、いづるいきをまたずして、とほることなれば、廻心もせず柔和忍辱のおもひにも住せざらんさに、いのちつぎば、攝取不捨の誓願はむなしくならせおはしますべきにや。

一度び攝取の光に納められた以上は、煩惱を起しながら命畢るとも必ず御助けに預る事は間違ひない。併し自分では強いて喜ばうと思はずとも、自然に喜べて来るやうに立ち歸るが攝取不捨の徳である。夫故『歎異鈔』の次の文に、

わろからんにつけてもいよく願力をあふぎまゐらせば、自然のことほりにて柔和忍辱の心もいてくべし。すべてよろづのことにつけて、往生にはかしこきおもひを具せずして、たゞほれ／＼と彌陀の御恩の深重なることをおもひいだしまゐらすべし。しかれば念佛もまうされさうらふ。これ自然なり。わがはらはざるを自然とまうすなり。これすなはち他力にてまします。

之れ攝取不捨の御力にて自然々々に煩惱の雲霧が晴れて、慈悲に立ち歸る有様であります。『正信偈』に

攝取の心光は常に照護したまふ。己に能く無明の闇を破すと雖も、貪愛瞋憎の雲霧、常に眞實信心の天に覆へり。誓へば日光の雲霧に覆はるれども、雲霧の下明かにして闇なきが如し。

と仰せられたが實に此の味はひてあります。一度び攝取の光に入れば最早や煩惱は起らぬかと言ふに、さうては無い。譬ひ無明の闇みは破れても、猶ほ煩惱の雲霧はかゝつてある。譬ひ其雲霧はかゝつてあつても、世の中は明かにして闇無きが如く、一度び慈悲を頂いた身は、心底が安心である。『略文類』の中には其慈悲に氣のついた程を示されて、

必ず無上淨心の曉に至りぬれば、三有生死の雲晴れ、清淨無碍光耀朗かに、一如法界眞心顯はる。

と仰せられた。之が攝取心光の中に納め取られた有様であります。蓮如上人が『御文』の中にいつも攝取不捨の味はひを示されて、八萬四千の大なる光明を放つて光の中にをさめとりてすてぬと仰せられるのが、此の攝取不捨の光明の中に抱かれたる心持である。蓮如上人がいつも「斯の如くの大きいなる言葉を以て示し下さるゝ事は、決して無意味では無い。蓮如上人御自身が彌々信仰に入られた時の感じを打明けてお示し下されたのである。之が即ち八萬四千の大なる光の中にあさめとられた心持であります。『略文類』に「河白道の」西岸上に入ありて喚んで言はく汝一心正念にして直に來れ、我能く護らん」とある言葉を釋し給ひて次の如く仰せられてある。

西岸上に入有りて喚んで言はくとは、阿彌陀如來の誓願な

り。汝の言は行者なり。斯れを則ち必定の菩薩と名く。龍

樹大士十住毘婆沙論に、即時入必定と曰へり。曇鸞菩薩の論には、入正定聚之數と曰へり。善導和尚は稀有人也、最勝人也、妙好人也、好人、上々人也、眞の佛弟子也と言へり。(乃至)護の言は、阿彌陀佛果成の正意を顯はすなり。亦攝取不捨を形はすの貌なり。則ち是れ現生護念なり。

と仰せられた。之が即ち攝取の心光に護らるゝ有様である。而して之が現生護念の御利益であります。現生十種の益中にも心光攝護の益とあるが之である。前に引いた和讃に「九十五種世をけがす、唯佛一道さよくます、菩提に出到してのみぞ、火宅の利益は自然なり」とある、此の火宅の利益といふが、現生護念の事であります。斯く頂く時は、我々はいつもの如來攝取の光明中に日を送り、朝に夕に此の恵みの中に、或は醒め、或は眠り、常に佛に抱かるゝ有様が攝取不捨である。

『安心決定鈔』に

佛身をみるものは、佛心をみたてまつる。佛心といふは大慈悲これなり、佛心はわれらを慈念したまふこと骨髓にとほりて、そみつけたまへり。たとへば火の炭にあこりつきたるがごとし。はなれんとするとはなるべからず。攝取の心光われらをてらして、身より髓にとほる。心は三毒煩惱の心までも、佛の功德のろみつかぬところはなし。(乃至)また唐朝に傳大士とてゆゝしく大乘をさとり、外傳にも達してたふとき人おはしき。そのことばに曰はく、あさなく佛とともにあさゆふなく佛をいだきてふすといへり。(乃至)攝取の心光に照護せられたてまつらば、行者も

またかくのごとし。あさなく報佛の功德をもちながら

あさ、ゆふなく彌陀の佛智とともにふす。

斯く朝な／＼南無阿彌陀佛と共に起き、夕な／＼南無阿彌陀佛と共に臥すのが、心光攝護の樂みの極であります。南無阿彌陀佛々々々々々々々々

蓮如上人『御一代聞書』にのたまはく

一、十二月六日富田殿へ御下向にて候あひだ、五日の夜は大勢御前へまいりさふらふに、仰に、今夜はなにことにひとおほくきたりたるぞと、願誓まふさん候はまにに、このあひだの御聽聞まふしありがたきの御禮のため、また明日御下向にてさふらふ、御目にかゝりまふすべしかのあひだ歳末の御禮のためならんとまふしあげられけり。その時仰に、無益の歳末の禮かな、歳末の禮には信心をとりて禮にせよとおほせさふらひき。

一、勸修寺村の道徳、明應二年正月一日に御前へまいりたるに、蓮如上人おほせられさふらふ、道徳はいくつになるぞ、道徳念佛まふさるべし、自力の念佛といふは、念佛おほくまふして佛にまいらせ、このまふしたる功德にて佛のたすけたまはんずるやうにおもひてなるなり、他力といふは彌陀をたのむ一念のおこるとき、やがて御たすけにあつかるなり、そのうち念佛まふすは御たすけありたるありがたき／＼とおもふこゝろをよろこびて、南無阿彌陀佛に自力をくはへざるこゝろなり。されば他力とは他の力といふこゝろなり、この一念始終まてとなりて往生するなりとおほせさふらふなり。

告白

世諦の苦みによりて眞諦の光を見る

牧田平太郎

去る七日の第一土曜日に、九段の求道講話を拜聴に参りました處が、丁度此の日は九段の信仰談話會に當る日なので、先生から私に是非信仰の状態を告白せよとの仰せて有りました。併し何分にも筆のまはらぬ私にはとても出来る事でも無く、假令申し述べた處で、此の有難き御慈悲を充分書き表はす事が出来ませんのは、誠に勿體ない事ですけれど、何もかも佛様の御命令と思つて、耻しながら告白を致さして戴きます。

私は日本のアルプスとも云はるゝ山ばかりの飛騨國の一寒村の一小農家に生れた田舎者で御座います。唯有難い事には、私の家は眞宗に流れを汲み、猶私の母は或る眞宗の寺より來て居られるので、生來佛縁は深いので有ります。夫れて母の里の御祖父様や御祖母様は、殊に私を愛して下さるので、幼年の間は、殆ど母の里で成長したので有りますから、朝夕には佛様に御詣をしたり、又色々に佛様の御話等もして聞かされました。併しながら、中學へ入學してからは段々と佛様へは遠

ざかる様になりました。寺へ参詣するのも何となく耻かしい様で、佛様へは殆ど参らない様になつてしまひました。のみならず、佛を疑ひ極樂を信ぜず、未來の事などは更に顧る事無く、毎日々々の日を、無爲に暮して居ました。是れ迄は別段に不平と云ふものも無く、又悲しむべき事も有りませんでした。が、中學の四年頃から、前の心とは段々と變化を來たしました。是は外の事でもないが、元來私は慷慨の精神に富んで居たものですから、見るもの聞くものが如何にも満足の出來ないもの許りで有る様に思はれて、社會は段々と拜金主義、利己主義に傾きつゝ有るものゝ如く考へて、今や社會は腐敗墮落して居ると叫んだので有ります。又一方には社會の改善を計り、又國民の健全なる精神を養成すべき任務に在る教育家、宗教家は如何と觀れば、是れ又腐敗墮落の渦中に卷込まれて居る様で、現今の社會に何等一點の光明をも認むる事無く、精神的文明の清き流れが、濁流天を漲る物質的文明の爲めに、殆ど流失するゝかの如き觀が有りまして、右を向いても左を向いても唯奮慨の種ならざるは無かつたので有ります。我が國が今後數十年間、此の状態を繼續するならば、或は羅馬滅亡の覆轍を蹈むの恐れなきかと悲觀した事も有ります。其の頃私の理想とする處は、此の腐敗せる社會に根本的大改革を施さねばならぬと云ふのでした。而し此は理想と云へば理想であるが、先づ一つの空想に過ぎないのです。此の空想を誰れか聞いてくれる人でも有ればまだ幾分か慰安の道も得られたでせうが、是れを聞いて呉れる人は一人も有りませぬ。時には聞いてくれる人が有るかと思ふと、僅かに冷

笑を以て迎へる位で有る。併し私は人が何と笑はうと何と云はうとも此の社會改良、墮落の救済に付て日夜考へて居た。そこで私は此の社會改良は第一に宗教の力に依らなければならぬと考へたのであります。

兎に角、社會の腐敗を叫び、改良の必要を論じたのは、私が人生上に於て満足の出來ざる不平の結果一種の煩悶から起たのであります。而して社會改良の必要より宗教の必要を信じ、宗教の研究をして見度い心が起りましたので有りますが、又他の一方に於て私の信頼して居る宗教の現状は如何と顧みますと、是れ又悲觀の種となりて、奮慨に堪へなかつたのであります。即現今の宗教家は三千年前出現有らせられて、一切の衆生を救はん爲めに、國家を棄て、親と離れ、王位を捨て、有らぬ一切のものを打捨て、説法あらせられたる大聖釋迦牟尼世尊の遺教を傳へる重大なる職分たるを忘れて居るものゝ如く思はれたのです。唯だ彼等は、我こそは悟れりと言はん許りの顔をして、無學の俗人を瞞着して居る如く、宗教家として有るまじき處の利慾に許り眼を向けて、自分の職分などはそつちのけて、布施の多少で心の動く様な坊主許りで有る如く、此の有様では社會改良の大問題の前に、先づ彼等坊主に一大鐵槌を加へてやらねばならぬと思ひました。(此様な事を只今申述べるのは誠に勿體ない事で御座いますけれど、順序だから申します。)現今の僧侶が社會より段々冷遇され、又排斥されつゝ有るも、決して偶然ではないと思ひました。私は此の時に當つて一時も早く佛教の大改革をなすべきムーテルは出てゐるかと思ひました。此の奮慨の心を誰に打ち開けて話す者

も無く、又是れを聞く耳も無いので、唯だ一人で深夜皎々たる月下に孤座して、研ぎたる月を眺めつゝ斯く獨語したのであります。即ち三千年前に釋尊の頭上を輝かしたる月は、今現在、吾人の頭上を照すので有るから、今私が悲しんで居る悲みや歎きを此の月に向つて訴へたならば、どこともなく胸がすく様ではないかなどと。

そこで私は一般の社會を見ても不満、宗教界を見ても不平、實業界を見ても同じ事、あらゆる方面の社會に我れを入れる餘地なくして、私は全く厭世觀を起して、花鳥風月を友として、鐵一挺をかつぎて、自然のなすがまゝにまかせて、社會と全く離れたる田園生活をなさうかと思ひて居たのであります。

此くの如く煩悶の絶へざる處へ、かてゝ加へて病氣に罹つたのです。抑此の病氣が私の心的状態に一變化を來たしたのであります。夫れは今迄は唯社會の方面に向てのみの不平で、一身上の事には餘り頓着しなかつたのであるが此の病氣の爲め非常なる無常觀に打たれたので有ります。此様になると人間と云ふものは誠に勝手我儘な者で、今迄他の方面に許り眼を向けて居たのが、忽ち我が身の上の問題に付て解決を付けたいと思つたので、今死せばどうなるのだらうかと云ふ不安の念が起つて、早速慰安の道を求むる事にせねばならぬと思つて、色々説教なども聴聞し、又佛様へも参詣しました。又佛典の研究を致したいと思つて、彼の村上博士の佛教統一論の第一編や、第二編などを盛に讀みましたが、仲々解りよく書いて有るので、其の理屈は成程と思ひましたが、一番肝

心な佛様がみとめた様でみとめられぬ様で、丸て雲をつかむ
 だ様で、一寸とも有難く無いのみならず、自分て色々と理屈
 を付けたものすから、朝に信じた佛は夕に消えてしまふ。
 又地獄だと云ふて餘り恐ろしくも無く、又極楽だと云ふて、
 何うも有難くない。極樂や地獄は人間が此くの如くかつてに
 分類して、作たもので有る如く思はれましたが、而し何か此
 の宇宙に極く偉大な何物かが有る様に思はれて、其れが即ち
 宇宙の實體であり、又本體で、之を佛敎で佛陀と名づけたの
 て有ろうと思ひました。又此の宇宙の實體より宇宙の萬物が
 現象となつて現れて來て居るのて有る、即ち人間も此一種
 て、若し此の身體が滅し去つたならば、忽ちに宇宙の實體に
 當人の精神、即ち神靈が歸する如く考へたものですから、死
 と云ふものも餘り恐ろしくない様な感がありました。又佛敎
 て云ふ不思議と云ふ様な事も、宇宙間の凡ての現象が皆一定
 の基礎に於ける法則に支配され居る如く考へて、其の法則は
 人間の力て到底知る事の出來ざる不思議な力を持つて居るが、
 其の眞理を飽迄探究する事は不可能の事だと信じ、其の不可
 解の處に存する何物かが所謂佛敎の不可思議なるものだと思
 ひました。此の時恰も藤村操氏が宇宙の眞理が不可解とか云
 ふ爲めに、厭世の餘り遂に身を華嚴の瀧に投じたと云ふ事を
 聞いて、深く同情の感に堪へなかつたのです。茲に於て眞理
 不可解とすると、今迄の自分勝手に作つたさめ込みの信仰で
 は一寸も安心が出來ざるのみならず、猶疑惑は益々疑惑を生
 むと云ふ有様で、最早や何うしてよい解からなくなりまし
 た。

のみならず、全く私の理想に溺れて居たのです。今日其の事
 を思ひ出すと、身も戰慄する位て有ります。夫れから土京後
 と雖も私の煩悶は以前と少しも異ならず、一方に於てはなつ
 かしき両親の膝下を離れて、遙か東都へ來て見ると、故郷の
 空が殊に戀いしくて何處となく心淋みしく感じました。又東
 京の人間には、宗教心などは、我が故郷よりも一層少なくて、
 其の上に生存競争は甚だ激烈で、全く拜金主義の盛な處と思
 はれました。兎に角私は未だ精神上の慰安、即ち精神の基礎
 が出來て居ないから、先づ第一に此の基礎を作らねばならぬ
 と思ひましたので、宗教家や教育家の名士の演説の何處かに
 有る時には、必ず聴きに行きました。而し名家の説は甲乙互
 に異なる事や、或は衝突する事が有つて、私の心には益々迷た
 のてあります。誰か世の中に此の迷を解き開いて、恰も正々
 堂々たる大道を踏める様に切り開いてくれる人は無いかと望
 て居ました。或る日九段の方へ散歩に行きて、坂を登りつゝ、
 右の方を見ました所が、眞宗説教所に於て近角常觀師の講話
 の有る揭示が有りましたから、まゝ何んな講話か、入つて聞
 いて見ようかと思つて入りました所が、最早先生の講話は終
 つて居た。けれども參詣者が、輪を造つて先生に色々と質問
 をされて居ましたが、其の中で或る學生が頻りと先生に尋ね
 て居られます。其の大要は矢張り思想上の問題で、吾人が佛
 を認めたいと思ふけれども認める事が出來ぬとか、人生の目
 的が解からぬとか、其の他色々尋ねられた時に、世間には
 私の様なものも有るのかなと思つて、大きに力強くなりまし
 て、此の後は何んでも此の先生に付て聞く方がよいと思つて

斯くする間に中學の課程を卒へたので、大に自分の志す處
 の目的を達したいと思ひましたが、併し同窓の友は皆眞面目
 に各々志す所の着實なる専門教育を受ける様で有るのに、僕
 ばかりは、誠に不眞面目なる、又突飛的な事をなすのが寧
 る僕の天性と思ふて居ました。而し内心には、密かに他の者
 は金や名譽の奴隷となつて居るにもかゝらず、僕のなさん
 とする所は最も神聖なる事等と考へた。然して此の目的を達
 せんと思ふには、勿論東京へ出て、哲學の研究を致さねばな
 らぬと思ひ、上京せん事を望んだのです。然しながら、私の
 上京するに就いては、少なからざる、色々の事情が付き纏う
 て居るので、自分も大に思慮せねばならぬのに、其の實、家
 の事などはさほど考へず、只自分の理想を發現したい、自
 分の所信を飽迄貫徹したいと思ふのみでありました。けれど
 も父は私に教育を受けさせる目的は、我が家の基礎を強固に
 し、家の將來を計りたいと云ふ事で有りましたので、私は父
 の意に従ふべきか、又自分の所信に向ふべきか、二者、其の
 何れを取るべきかとの問題に、大に惑ひました。が結局、父
 の意に従はねばならぬ様になりまして、上京は致しましたが
 私の内心には今迄の理想とする處に向ひ度いと云ふ野心が、
 仲々抑へ難かつたので御座います。

けれども、私の精神は未だ確固たる基礎の上に無いのにも
 かゝらず、一種の理想に憧憬して、毎日／＼の日暮を實に
 不眞面目なる生活を送つて居たのです。此の様な浮き浮きし
 た私なるにもかゝらず、父は満心あふる／＼許りの愛を以て
 私に向て下さるので有りました。けれども一向有難く感ぜぬ

其後毎土曜には必ず九段の講話に參詣致して居ました。今つ
 ら／＼考へますに、此の時先生に遇はして戴いた御縁は、千歳
 忘るべからざる有難い事で御座います。是れ即ち、佛様の私
 を憐みて下さる確證とも云ふべきで有ります。若し此の時遇
 はして戴かねば、永劫浮ぶ瀬の無き私で有つたに違ひ有りま
 せぬ。私は此の時に他力攝生の旨趣を受得し、凡夫直入の眞
 心を決定して戴く事は出來無つたのですけれど、誠に勿體
 無き事では有りますが、彼の七百年前に宗祖親鸞聖人が吉水
 の禪坊に御尋なされたと、聊か其の趣を同じうして居ます様
 で、實に有難く喜ばして戴いて居ます。

夫れから或る日に、森川町に先生の御經營なされて有る求
 道學舎と云ふ寄宿舎が有ると云ふ事を聞きましてから、どう
 かして其所へ入舎させて戴いて、大に修養を致したいと思ひ
 ました處、幸に郷里の人で渡邊誓海氏(僧侶)が先生を知つて
 居られると云ふ事で、早速渡邊君に斯く申しましたれば、渡
 邊君も承知して私と同道して求道學舎へ参りました。

而して先生に御願ひ申しました所が、先生の御言葉には
 「只今は欠員が無いから他日欠員の有るときゆるす」との事
 て又「毎日曜日には、なるだけ講話を聞きに來い」との事で
 有りましたから、先づ其時は大に失望して辭して歸りました
 が、其の後は一日も早く入舎をさせて戴きたいと思つて居ま
 した。

私は一體、下宿屋に居る事は餘り好かないのですから、何
 處かに素人屋で家庭的寄宿をさせてくれる所は有るまいかと
 思ひました處、或る知人の家て世話をしてくれると云ひまし

たから、喜んで世話になる事に致しました。段々世話になつて居ます内に、誠に恥しい事です。私の心中に人生上の問題に付て、強き對他の惡感情を起して、煩悶の炎が又もや燃え出しました。其處で人を惡く思ふてはよくないから、どこ迄も善く思はねばならぬのだと、飽く迄自分て抑へ様とするけれども、仲々抑へる事が出來ざるのみならず、益々其の炎は強くなる許りで有りました。此の煩悶を何うかして消したと思つて、毎日曜日の講話には必ず參詣して居りましたが、此の御蔭で僅かに其の炎を抑へて居たのです。而し是れは全く律法的の抑制ですから、其の苦しさはとて堪え切れませんでした。夫れや之れやて大至急學舎に入れて戴きたいと思つて居ましたから、或る日學舎へ參りまして、先生に面會を求めました處、折悪しく先生は御病氣で面會は出來ませずして空しく歸りました。其の次の日曜講話に參詣して、今度は是非入舎を許して戴きたいと願ひました。先生も心よく御承諾して下さつて、早速入舎をさして戴きました。私の此の時の嬉しさは非常なもので御座いました。又兩親へも此の事を言ふてやりました。兩親も非常に喜んでくれました。私が學舎へ入れて戴きたいと願つてから、御許し下さる迄が約一ヶ年も経ちましたが、此の間毎日曜に參詣する度に、精神上の煩悶、或は信仰上の疑惑などを常に抱いて居ましたので、先生の講話を聞く度に其の御話し下さる事が、極く適切に私の心に響いた事が澤山有りました。丁度自分の疑問に對して御答へをして下さる様で有りました。而しながら未だ絶對の御慈悲に氣付かして戴く事は出來せなんだから、未だ疑

惑の念は去らなかつた。夫れから入舎後は専ら求道に餘念なかつたですが、佛様の御慈悲が有難く有る様で、無い様で、何うも取りとめの付かない様で有りました。常々先生の御指導に依りまして、有難く喜ばして戴て居る事も有りましたけれども、何か人と意見の衝突した時など、或は人の爲す事が自分の意に滿たぬ時などは、忽ち佛様の御慈悲の事などは打ち忘れてしまつて、信仰は斯く々々だけれど、人生は斯く々々せねばならぬのだと、人生と信仰とが全く別々になつてしまひますので、未だ、完全なる信仰に到つて居ないと思つて、此の黒雲を早く去りたいと思ひましたが、此く思へば思ふ程仲々去らぬのみならず、火に油をかけた如くて、益々強くなる許りで御座いました。先生の御教示下さる事に依りまして、私の如き罪惡の深き凡夫、三毒の煩惱の塊に向て、飽く迄捨てさせられざる御慈悲で有るとは知らせて戴きましたけれども、信仰と人生と別々に成つて、私には人生上の問題の起つた時は力無き御慈悲と消え去つたので有りません。此くの如き心の状態の時に當りて再び云ふべからざる人生問題の苦痛に出遇たので有りません。此の問題に遭遇した時には、只對他の觀念のみ強くして、假令内心を顧ると雖、自から五分五分の人間で有るとは決して思へない。自から進んで飽く迄、此の問題を解決せなければならぬと思ひました。猶先生から常々「吾々が日夜遭遇する多くの人生上の問題は、凡て我々を御慈悲に氣付けしめて下さる善巧で有る、方便で有る」とは御知らせ下されたけれども、今現在、此の問題に遭遇した時に、是れは全く佛の善巧方便だから大に喜ばな

ければならぬ、有難く思はねばならぬと心がけたけれども、眞から有難くならないのみならず、只人生上の現在の問題にのみ頭を悩まして居ました。此の煩悶の時は今年の三月頃で有りましたが此の煩悶に對して先生から御話を承りたいと思ひました。けれども此の時に先生は九州地方へ傳道に御出になつて居られましたから、御尋ね申す事も出來ませず、毎日の日を實に不愉快に暮して居りました。處が四月一日に眞宗大學の催しにかゝる親鸞聖人の降誕會が、淺草本願寺に於て舉行されると云ふ事を聞きましたので、參詣致しました。

會に於て多田さんの講話が有りましたが、此多田さんの講話の内に「我々は恩を思ふと思へない様なあさましき人間で有る」との一句を聞きまして、此の一刹那に涙で胸が一杯につかえ、又心に響いた事は恰も鎗で以て胸を突かれた様で、忽ち慚愧の涙は處かまはず湧出して、若し人でも居なかつたらば、男泣きに泣き出した位で有りました。あゝ惡かつた、あゝ僕は惡かつた、恩を思ふと思へない私に、此んはに憐むて下さる御慈悲が有難いと、一點氣を附けさして戴くなり、今の今迄人生問題に向てのみ、彼れは悪いとか、之が好くないとか、斯くせねばならぬとか云うて居たは、全く間違ひであつた。自分が不遜や愚鈍な奴だと氣が付かないで居たのは、何たる勿體なき事で有つたかと、唯々慚愧の至りに堪えなかつた。唯口には南無阿彌陀佛々々々々と有難く稱名念佛致さして戴きまして、身心共に輕くなつた様で、胸もすっきりとしました。

此四月一日は我が宗祖親鸞聖人の我々苦惱の有情を濟度せ

ん爲めに、此の生死の闇に、御誕生あらせられたる聖日なると共に、又私に於ては、無限大悲の恩徳を感得せしめ下されたる無二の紀念日で有ります。此の御慈悲に氣を付けさして戴きました事を嬉れしさの餘りに、先生の傳道先きと、兩親へ早速申し上げました處が、先生には殊の外御喜び下されて、御手紙を下さいました。又兩親も大に喜んでくれました。

無碍光の利益より、威徳廣大の信を得て、必ず煩惱の水が解け、即ち菩提の水となる。罪障功徳の體となる、氷と水の如くにて、氷多きに水多し、さばり多きに徳多し。名號不思議の海水は、逆勝の屍體もとゞまらず、衆惡の萬川歸しぬれば、功徳のうしほに一味なり。盡十方の無碍光の、大悲大願の海水に、煩惱の衆流歸しぬれば、智慧のうしほに一味なり。で、私の喜ばして戴く味を自分の廻らぬ筆で申し上げるよりも、以上の和讃で申し上げた方が何もかも盡きて居ると思ひます。

私が始めて煩悶して居た頃に、何でも信仰は研究で無くしてはならぬ、大に宗教を研究せねばならぬと思つたのは大いなる誤りでありました。歎異鈔に各々十餘箇國のさかひをこえて生命をかへりみずして、づね來たらしめ給ふ御志、偏に往生極樂のみちを問ひ聞かんが爲めなり。然るに念佛より外に往生の道をも存知し、また法文等をもしりたるらんと、心にくゝあほしめし

はしましてはんべらんは、大きな誤りなり。若し然らば、南都北嶺にもゆゑしき學生たち、あほく座せられて候なれば、彼の人々にもあひたてまつりて、往生の要よくさかるべきなり。親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀に助けられまいらすべしと、よき人の仰せをかうふりて、信ずる外に別の子細なきなり。

此の有難き御慈悲に氣付かして戴く事は、學問して獲るに有らず、研究して獲るに非ず、修養を保ちて獲られるに非ず、唯々彌陀の御催しに預りて戴く外は有りませんと思ひます。又私が先生に遇はして戴いた事なども、全く私の力や私の計らひとは思へませぬ『執持鈔』に、

故聖人(黒谷源空上人の事)の仰せに、源空があらんところへゆかんと思はるべしと、確かに承りし上は、假令地獄なりとも、故聖人のわたらせ給ふところへ詣るべしと思ふなり。此の度若し善知識に遇ひ奉らずば、われ等凡夫必ず地獄に落つべし。然るに今聖人の御化導に預かりて、彌陀の本願を聞き、攝取不捨のことはりをむねにあさめ、生死のはなれがたきをはなれ、淨土の生れがたきを一定と期すること、更に私の力に非ず。たとひ彌陀の佛智に歸して念佛するが、地獄の業たるをいつはりて、往生淨土の業因ぞと、聖人さづけ給ふに、すかされまいらせて、吾れ地獄にをつと云ふとも、更にくやしむあもひあるべからず。そのゆへは明師に遇ひたてまつらてやみなましければ、決定惡道へゆくべかりつる身なるが故にとなり。

私が此の御縁が無つたら再びと浮ぶ瀬の無きもので有つたの

かと思ひますと、唯だ感謝の念に堪へませぬ。

又私の過去半生を回顧致しますと、何一つとして佛の御恵みがこもつて居ない事は無いと思ひます。此の恵みを御知らせ下さる爲めに、種々なる出来事に遭遇して下さつた事は、此のたより無き人生をたよりにして居るのが誤つて居ると云ふ事を御知らせ下さる善巧方便で有つたと氣附かして戴きますと、今の今迄我儘勝手自分の物尺で計つてばかり居たのを思ひ出し、實に慚愧の至りに堪へませぬ。

以上私の信仰を獲て戴きました経過を、長々しく申述べましたが、其の事どもは一つとして此の廣大なる御慈悲を喜ばして戴く種とならざるものは有りませぬ。のみならず全く我一人の爲の親心で有るかと思ひます。是れ全く私が永劫の間、迷ひに迷を重ねたる惡凡夫罪惡深重の子たる事を自覺して戴いた事と思ひます。即ち『歎異鈔』に

聖人の常の仰せには、彌陀の五劫思惟の願を、よく案ずれば、偏に親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業を持ちける身にありけるを、たすけんとおぼしたちける本願のかたじけなさよと、御述懐候ひし事を云々……さればかたじけなくもわが御身にひきかけて、われらが身の罪惡の深き程をも知らず、如來の御恩の高き事をも知らずして、まよへるを思ひ知らせんが爲にて候ひけり。

自分の罪惡の深き事をも知らず、佛様の御恩の高き事をも知らずして、毎日々々の日暮を全く煩惱づくめて生活して居る事を、思ひますと、何とも言ふて見様も無く、淺間しき人間だと歎く事も有りますけれど、斯く淺間しき私一人の爲

の親心かなと、御慈悲の有難き事に立歸らして戴きます。猶ほ又、私が此の頃最も痛切に氣を附けさせて戴きます事は、此親鸞聖人の御文に、

誠知、悲哉愚癡、沈没於愛欲廣海、迷惑於名利大山、不喜入定聚之數、不快近眞證之證、可耻可傷矣。

と有りますが、聖人にして此くの如き峻酷なる懺悔を致たされましたが、私の如き愚痴の塊、罪惡の塊、貪欲の塊、煩惱の塊には、何と懺悔してよいか、到底言葉は有りませぬ。然も、しかるに佛かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおぼせられたることなれば、他力の悲願はかくのごときわれらがためなりけりと知られて、いよくたのもしくおぼゆるなり

と仰せ下さる事で有りますから、誠に心丈夫で御座います。

猶ほ又、

無明長夜の燈炬なり、智眼くらしとかなしむな、生死大海の船後なり、罪障をもしとなげかされ。

願力無窮にましませば、罪業深重をももからず、佛智无边にましませば、散亂放逸もすてられず。

の和讃を有難く拜讀して戴きます。

又つら／＼吾が身の現在を省みますと、彼の阿闍世王の獲信に付て深く喜ばして戴いて居ますが、殊に阿闍世王の世尊に懺悔せられた言葉を見ますと、全く私と同じ様に思ひまして有難く御座います。即ち(先生の「懺悔録より」)

佛世尊よ私が世間を見ますに、伊蘭樹と申すあの至極臭

い厭やな樹の種子からは、必ず、伊蘭樹の生へ出づるは當然であるが、決して伊蘭樹の種子から、あの結構な栴檀香木の生へる例はありません。然るに不思議ではありませんか、唯今は伊蘭の種子から、栴檀が生へました。伊蘭と申したは我が身であります。栴檀とは私の今得たところの信心であります。して見ますれば、この信心は、無根信と申してよからうと存じます。私は始めの間は佛陀を信ずることとは出来ませんでした。

若も私も佛陀に遇ひ奉らなれば、無量永劫無間地獄に沈んで無限の苦みを受けるのであつたに。今幸に佛陀を信ずることを得て、未來永劫の大幸福の基が出来ました。實に不思議の中の不思議で御座います。今かく私が佛陀の慈悲に遇ひたてまつりて、私の胸の中に與へられたる大善大功徳の佛の御力は、罪惡深重煩惱熾盛の一切の衆生の、惡しき心を破壊して下さるゝと

私之れを見ますと私自身が世尊の前にひざまづいて、懺悔して居る様に思はれます。

私が信仰を獲て戴いた日が親鸞聖人の御誕生日の四月一日で有つて、又之れを告白して戴いた月は、聖人の御入滅なされた月、即ち十一月で有るとは、どこからどこ迄佛様の御縁の深い事だらうと喜んで居ます。

山は山道は昔にかはらねど

變りてはたなる我が心かな

(山伏辨圓)

私が此の御慈悲を喜ばして戴いてより、世の中の未信の人々には一層と同情心が深くなりまして、此の御慈悲を知らざる

人々には、一時も早く御知らせ申したいばかりで御座いますけれども、私の方では何一つとしてなす事は出来ませぬので御座います。其の上に誰一人でも此の御慈悲を被らぬものは無いのですから、佛様はよろしき様にして下さいなされます。ですから何もかも佛様の御催しに任かせ申すのが、何より有難い事と思ひます。

以上あまり長く述べまして、誠に失禮な事で御座います。茲に最後に皆さんに一寸申上げたい事は、我々が此の人生此處する上に於て、此の佛様の御慈悲を戴かずしては、何事もなる事が無い事で御座います。即ち政治にせよ、實業にせよ、宗教にせよ、教育にせよ、人生百般の事業に従事する人々に於て、此の如來の恩徳を感謝の下に、日暮をさして戴くならば、國家は期せずして榮え、社會は願はずして平和なる事を得ると思ひます。即ち、

心だに誠の道にかないなば

いのらずとも神や守らん

て我々は此の絶對なる佛様の恵を戴いた以上は、自分の弱き力を頼みにして彼れ是れ悶だえる必要は無いと思ひます。然るに現今の人は、多く自分の意に及ばぬ事で悶えて居ると云ふ事は、即ち我々の身邊に絶大なる佛の恵の満ち／＼て有る事を知らずして、唯だ自分勝手の手物尺で以て、世間を計つて、好き結果を求めやうとするから有ると思ひます。

吾人が遠い處に有る結果ばかりを眺めて居て、自分の足下を顧みないものですから、遂には倒れる様になるので有ります。現今の人々口を開けば必ず好き結果、即ち成功を望むと

云ふ事は、此の絶大なる如來の恵を知らずして、却て小刀細工を加へて人生の幸福を破壊する事につとめて居る様に思ひます。

茲に於て私は一旦此の御慈悲に氣付かして戴た以上は、此の如來の恩徳の下に、平和なる人生を送る爲めになす處の業務は、皆如來大悲の御恩を報ずる事と喜ばしてもらいます。

如來大悲の恩徳は、

師主知識の恩徳も、

身を粉にしても報すべし、
骨をくだきても謝すべし。

南無阿彌陀佛々々々

明治四十一年十月十七日

求道學舎に於て拜記

明年の求道は第壹號より新に
聖德太子十七憲法の講義を開始して、あらゆる
人生問題は唯信仰の一を以て解決すべき事を論
じ、又
歎異鈔講義は益々歩を進めて、信仰問題の蘊奥
を聞かんと欲す猶ほ
講話告白等従前の如く、同朋諸氏と共に、如來
の厚恩を感謝し奉る可し。

歡喜之記

長野 貞一

わたしが御信心を頂かして貰つた其時の記を書けよと、法兄の切に、すゝめらるゝに任せて、甚だ恥づかしい次第であるがわたしの経験から、信心を得るに至つた道筋を少し書いて見ようと思ひます。

わたしの生國は加賀でありまして、この國は昔から當流の御宗旨が盛んで、わたし等も、小供の時から經文を教はつたり、説教を聞かして頂いたり、今から思へば、佛縁の淺からぬ者であります。始めて上京したのは、三十七年の春、即ち廿歳の時で、この時分は、希望の志が胸に充ち／＼て、未來には、必ず、一かどの大學者になれるなど、あらぬ空想に小踊した事もありました。始めの程は唯、何となく都會が面白くて、學校が愉快で、勉強も可成りに致しましたが、月日が経つて從つて追々、それが平凡な氣持がして、たまりませぬ。勉強も嫌になれば、學校も面白くない、かう云ふ時には、わるい事を、すぐ覺へるもので、わたしもカルタ、トランプの勝負事より、酒飲む事、さては悪い場所へも屢々、足を踏み入るゝようになりまして。

かうなると世の中が面白くて堪らぬ、外の友達が毎日／＼學校へ出掛けるのが、氣の毒な様に考へられる、今から思へば、誠に淺ましい次第で、身の措所も無い譯であります。其頃は得意なもので、世間は楽しい、遊び處の様に思ひました、されども、流石に雨の降る夜半など、獨りモデ／＼眠ら

れぬ時には、如何にも自分は罪惡の淵へ一步／＼墮ち行くのでは無いかと、心淋しく思ひましたが、其時には、何これしきの墮落は普通である、昔からの英雄豪傑で少年の時に酒色に耽らぬ者は一人も無いなど、益惡い縁を造つて、獨りよがつて居ました。

然るに昨年の晩秋でした、故郷にある祖母が病氣だと云ふ手紙が父の處から來て、大變に驚きましたが、其後、間もなく追々快方だと云ふ通知が來て、少し胸を撫ておろしますや否や、祖母が遂に没くなつたと云ふ電報が來まして、がつかりしました。

この祖母と云ふのは平常、極、壯健なる人で風藥一つ服んだ事の無い、至極丈夫な人でしたが、僅一週間の間に死んで仕舞ましたので、わたしも無常と云ふ事に氣が付きましたが、祖母は老年であるから死ぬのは當り前であると、つもらぬ理屈をつけて、猶意慢な生活を續けました。

處が餘り放埒な生活をなした結果でありましたか、今年の春、わたしは、ふと病氣にかゝり、他人が、やれ櫻が咲いた、上野や淺草へ行かうと申しまして、わたしには、それが出来ませぬ、毎日臥床の中で、淋しく暮らさねばなりませぬ、かうなると世の中が非常につまらなく感ぜられ、わが身が、これ迄爲して來た、過去の事を思ひ出し、大罪過を犯した様な氣持がして、今迄左程に思はなかつた故郷の父母の上なども氣に懸り、寐ても醒めても居られなくなつて來ました。

申すも恥かしい次第であります。人間程淺ましい、罪深いものはありませぬ、昨年の秋祖母の没くなられた時に左程にも思はなかつたわたしは、今度病氣になつて始めて、世の中の無常を痛切に感ずる様になつたのを思ひまして、穴にても入りたい氣持がします。

ね、幸、病氣は暫く治りましたが、心の苦しみは消えませぬ、丁度三月の二十八日、この二十八日は、宗祖親鸞上人の御没り遊ばしました日、わたし等は生國では極大切な精進の日として居りますが、この日の夕方、わたしの極仲の善い友達で、深く御信心を喜ばれ、これ迄度々、わたしなどにも宗教の話をして下さった方を訪問して、今迄の罪惡、心中の煩悶などを残りなく話しますと、其方は非常に同情して下さつて申さるゝには「わたしは今朝から何だか君の身の上が氣になつて、堪らなかつた、今君の熱心なる告白、求道の眞心を聞くのは全く佛の御引合せてであると云うて、さめくと泣き、猶言葉を綴るゝには、決して心配する事は無い、すべては事、唯わが計ひを捨て、一心に彌陀に御任せするより外はない、假令、吾等が如何に心中で、思うても、それが出来るものでも無ければ、又如何にすまじき事だと思つても、一度煩惱の念が萌せば、五逆十惡をも行ふのが人間であります、唯よきにつけ惡しきにつけ、一心に彌陀をたのみ参らすより、外は無いと懇に諭し、わたしはつて下さつたので、わたしも心から、嬉しくなり、これ迄の罪惡を懺悔して、感謝の念が油然而湧いて來まして、それから朝な夕な、歡喜の心から、ひたすらに佛の御名を稱へて、一日一日を送つて居りますが、淺間しや凡夫のこの身、閑な、隙がな、惡念は絶ゆる時がなく、誠に恥かしい次第であります、其都度、佛の御力で、引き上げて頂いて喜んで居ります。

それに世の中の無常が、またも、わが身に逼つて來て、この夏には最愛の妹を失ひ、自分も大病に犯されなどして一層人生の蹉跎と云ふ事に氣を付けさして頂きました。

「穠信見敬大慶喜」

常に歡喜踴躍の心を以て、心樂しく日を送り、共に彼岸の樂土へ行かして頂いて、永劫不盡の樂しみを得さして頂きましよう。(明治四十一年十一月)

故長谷部候補生遺簡

此の間一寸葉書を出したが、一先試験がすんだ。あまり不結果だつたが、死んだ子の年を數える愚はやめよう。但し中以上だ。

兄の葉書を貰うた時には、言ふに言はれぬ慰安と激勵と感謝と涙が出た。乃公は毎日試験前にあの葉書をよんで出た。大なる守本尊だつたよ。乃公は兄に對する感謝の念を得表はせぬ。

來月三日にはまた測量の一科があるよ。此頃から水泳が開始されて夕食事までは殆んど暇なしだ。二時に本課が終へて、三時十五分に別科が終へる。三時半から游泳がはじまり、上つて湯に入ると五時、五時半が夕食、今すんだ處だ。夜には睡魔がニヤ／＼笑つて誘ひにくるよ。コンパス、ペン等で防ぐ。それでも駄目の時は、勸諭の咒禁、之には眞に抵抗出來て道げて行くよ。乃公は去年から修養に志したが、此頃どちやらその門戸を見付けたよ。妙な話だが次の問題に對して、兄は如何な斷定を下すか知らんが、乃公は乃公で一つの斷定を下して、それに進みつゝある。

「人生の目的」と云ふのだ。乃公は一度何故に我が生きてるのかしら、勉強とか練磨とかしても五十年、而も眠ることや色々の事で正味二十年あるかなしかの間て何が出来るか。名が残りうが、死後ほめられた處で自分には何等の影響がない。

あくせくして苦しむのは、抑何の爲めか、馬鹿々々しいつて

らんと云ふ様な氣がした事がある。處て考へた後に、吾人は何處迄も靈の向上にとめ、永遠に此の向上に勉めて、萬事を幸ひせしむるのが人生の目的といふ事に考へ及ぼしたのでね。處が意志薄弱の、動もすれば高ぶり、僅かの事に挫き、世事の萬物に對して一々挫く様な弱い自分が、どうして向上出来るかといふ疑問が出來た。さ何か對絶無限の力があればそれによつて向上が出来るがな、と思ふと、無限絶對の何物かと欲しい。あるわい。兄は幸ひ寺にある。そうして朝夕絶對力をもたる、御佛の像を仰いでるだらう。如來が無限絶對の方で、慈悲と智慧のかたまりてあつた。現今科學が發達して何物でも科學で解釋つけんとしても駄目である。或る極限に至ると駄目だ。木の葉一つさへ何も分からんだらう。それで哲學がある。併し哲學も駄目だ。どうしても宗教によらなければ解釋が出來んのだ。實に無智な無明の吾人を憐れみ給ふて、常に吾人を加護し玉ふ、絶對の力を有し玉ふ、この御佛に氣がつかなんだのだが、近來この事を呉にある筑波といふ僧侶から聞いて、毎月一日の法話により、非常の慰安と、憶病なつたらん乃公も或る時には非常な力を感じて喜ぶ事があるよ。一昨々日も筑波師と、小早川といふ海軍中尉が來た。不思議な事には筑波師のニコ／＼した顔色に接すると、乃公の心がすつぱり洗はるゝ様な風で、實に言はれぬうれしさを感ずるのだ。小早川中尉には始めて會ふたが、余程進んで、その意志の堅き見識の高き、實に恍惚として中尉の修養談を聞いた。夏休暇には充分話さう。八月の二日か三日頃姫路に

握手が出來ようから。正覺寺の和尚さんは乃公は知らんが、とにかく兄が獨りて冥想して、吾人の目的を考へて見給へ。乃公は一昨々日は實にうれしかつたよ。大に修養して御國のため、世界のために盡さんには、偉大の力によるより外ないだらうと思ふ。いや信ずる。

尙ほかきたいが時間がきた。失敬する。

廣三兄、

二

佐世保に向けて出した手紙が舞鶴を明日出帆と云ふ前日之夜受とつて、再三再四拜讀して殆ど泣かん計りに感激した。

其後精神の不愉快のとき、外物の誘惑に氣のにぶる時、又は怒濤甲板を洗つて、船になれん候補生のヘド吐く時、兄の手紙に接してはボーッと感喜にうたれた。手紙出そう／＼として多忙に追はれ、今さへ筆とりはしめたが、今日中に出せないかも知れん。何しても、無限の慈悲、無限の力に對してはいつか打たれる時がある。實に不可思議千萬じやないか。闇の夜に鳴かぬ鳥の聲きけば生れぬ先の親ぞこひしき。

よく／＼穿つて考へてくれ玉へ、坊主臭い事や、いやに覺者振るじやない、どうしたつて、うか／＼榮譽や財産にあくせくする事じや人生不可解さ、口に五ヶ條を説き、裏に商賈やつる事じや、嘆かはざらんとするも出來ん、いくら世が物質になつたとて、吾人が之の濁流を堰き止めなんだらどうするか、然も意志の薄弱、智に乏しく、我利／＼の此の身、どう

したつて、絶對の御力にたよつて活動せにや出来ぬと思ふ。夜當直に出て只波の音ゆる／＼舷をたたく時、私に自己の心を解剖すれば、實に汚い、どこつゝいて見ても、虚榮虚飾、たま／＼いゝ心も幻の如しだ、とてもざんげも、自白も出来ない、倫理道德良心の制裁ではとてもやりきれない。

倫理道德にあてはめようか、苦痛、生爪剥かす様に益くしく、罪惡におそはれる。良心已に汚いのに馴れてる、臭いもの臭物知らずだ。自分計りじやない、六十のミツジツブメ、我利のかたまりだ、否世人の多く皆然りだろう。よく／＼眞面目に己れを省み、己を解剖したならどうだらう。僕は兄にすゝめるに切に自らを省み自心を解剖するにありだ。そして此の身のたよられん事を自覺し、此れほどまでに當にならん、罪ある惡に誘惑され易い吾をわれみ救ふ佛陀に依頼する外に道なき事を知られよ。佛を見出してこそ吾人の道開け樂生し勇氣出て心ゆたかになる。

心體光明開生有光とゆふ事が、探根譚にあるが、佛にたよつた時は眞に心が光明となる。己れが光りなくも太陽に輝かれて生ずる月の光のその如く、夜黒く風冷なれども、自光をみとめ、和風懷に満つる心持せらるゝ。

人間眞面目に考へれば儘かに一種言はれない心細さと、不満と淋しさを感じる、之が即ち眞實の心だろう。どうしても佛陀絶對の御力にたよつてこそ吾人の任務が果せよう。あつて思ふ處を十分に話したいが之は不可能だ。今度、旅順で話すことが出来よう。

軍人ほど立派な、精神確固たる、同情深いものは無いと思

高僧がある(龍樹菩薩)。

後藤！君と僕との間は決して今生斗りぢやない様に、心の或る者が斷言してる。共に／＼無限の地に進まざるべけんやだ。此の世斗りていくらはたらいでも、君國の洪恩幾萬分の一が果されようか。楠公の忠臣にして尙七生賊を亡ぼさんと云はれた。實際楠公は七生處じやない、永久生きて活動しつゝあるじやないか。伊藤公の、陛下に對する至誠は有難いが、僕は楠公たらんを希ふ。

義貞の忠勇はうれしいが、夫人句當内侍に對して愛に溺れた處が残念だ。

吾人は吾人の立場より離れたら間違ふだらう。立場は何だらう、五ヶ條の御聖旨だ。御聖旨を全ふするには誠心、この誠心の泉は絶對に出つるより外ないだらう。

兄よ身體動さつゝ光の中に動かざらんを期して呉れ玉へ。さあはかし中亂筆にて失禮。

廣三兄

小 弟



つたが、そうじやなかつた。此の言は只社會の者に比して幾分よしと言ふにすぎなんだ、吁。

學問が出来たものは人の迷惑を省ず、専心自己の研究、否えらく見られんとつとめる、出来んものは「どうでもいゝや」的の思ありだ。卓を叩いて絶叫したいが未だ此の言を發しられん、恐く狂として當にせんだらう。何故と言へば彼等已に狂醉してるだもの。五十八の候補生中僅か二人だ、眞に僕の話さき、共に勵ましつゝ道を辿るものは。

候補生で死のふが、大將で死のふが、自分の誠心を以て職務に忠なれば、それで宜しいと斷言する。

徒に士官風吹かせて、下士卒をどなり、説法するものゝ心中立場は何處にあるだらう。

誠心を以て五ヶ條の御聖旨に對し奉るその誠心、嗚呼この誠心耻し乍らこの誠心がいつもない。たま／＼起るはすぐに消ゆる、光明の中にある時がほんとうに誠心の活動する時である。

この光明の中にありて、光明を認めずんば實に寶の山に入りながら、手を空ふするの感なくんはあらずだ。生を知らず況んや死を我れ知らんと言はれた聖人の行動は、一の欠くる所がない。吾等の不徳な、不完全な能力以て生を考へ死を研究する必要はない、否不可能、不可解だ。萬端如來の使命のまに／＼「諸惡莫作、衆善奉行」すればいい。

佛とは何を岩間の苔衣、慈悲の塊、智慧のかたまりと拙者は歌ふ。

諸惡莫作、衆善奉行、自得其意、是諸佛教、と言はれた

講

義

歎異鈔

近角常觀

第十章

一念佛には無礙をもて義とす、不可稱不可說不可思議のゆへにとおほせさふらひき。そも／＼かの御在世のむかし、おなじ／＼さしにしてあゆみな遼遠の洛陽にはけまし、信をひとつにして心を當來の報土にかけしともがらは、同時に御意趣をうけたまはりしかども、そのひと／＼にとまひて念佛まふさるゝ老若そのかずをしらずおはしますなかに、上人のおほせにあらざる異議どもも近來はおほくおほせられあふてさふらふしつたへうけたまはるゝ、いはれなき條々の子細のこと。

上來、講じ了したる九章は前に述べたるが如く、全く親鸞聖人の御教化をそのまゝ書き並べられたものである。而してこれより以下の九章は此親鸞聖人の教化に異なる異議を一々擧げて其異なる所を歎き戒しめ給ふのである。故に歎異鈔は、前九章と後九章と二つに分つ事が出来る。前九章は聖人の教化そのまゝである故に、恰かも大學の經の如くである。即ち經は孔子自身の言葉を擧げたものである。後の九章は歎異鈔著者の筆に成つたもので、所謂歎異鈔の歎異鈔たる所以にして、畢竟前九章に顯はれたる聖人の教化に異なるものを一々正されたものである。それ故恰かも大學の傳の如きも

のである。傳は子思が孔子の言葉を一々釋されたるものである。なほ、これを教行信證に引當てみれば、前九章は眞實の教行信證、眞佛土の如きものにして、後の九章は化身土の様なものである。和讃の冠頭二首で云へば、前九章は「彌陀の名號となへつゝ、信心まことにうる人は」といへる積極的信を勧めたるものにして、後の九章は「誓願不思議を疑ひて、御名を稱する往生は」といへる消極的に疑を戒められたるものである。

そこで、前にも申しし如く、其信といひ、疑と云ふは、抑も何を信じ、何を疑ふのであるか。親鸞聖人と他の法然上人の御門下と左右に分るゝ分水嶺は何であるか。曰く、誓願不思議と云ふ事である。殊に大切なるは、此不思議と云ふ事である。誓願不思議と云ひ、名號不思議と云ひ、佛智不思議と云ひ、言葉は變りたりと雖も、畢竟我等如き惡凡夫を、助け給ふと云ふ威神功德不可思議である。近くは和讃の上に於て、其例を取つて云へば、大經和讃に「南無不可思議光佛、饒王佛のみもとにて、云々」無碍光佛のひかりには、清淨歡喜智慧光、其德不可思議にして、云々」至心信樂欲生と、十方諸有をすゝめてぞ、不思議の誓願あらはして云々」彌陀の大慈ふかければ、佛智の不思議をあらはして、云々」其他第十八願の他力の極致を示さるゝ時には、此不思議の言葉が欠けた事は無い。是れ、歎異鈔に於ても、劈頭、先づ「彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて、往生をとくるなりと信じて」と、何よりも先に此不思議を掲げて、信を勧められたのである。而して、疑を戒しむるも畢竟、此不思議を疑ふ事を戒しめらるゝ、

建仁二年正月二日

源 空

二年此御消息は實に簡潔なれども力強き御法語である。殊に、建仁とあれば、恰かも聖人御入室の翌年である。して見れば、聖人は法然上人より、度々此御言葉を拜聴いたされたのである。又法然上人も晩年に此御言葉を申されたものと見える。古德傳に曰く沙彌隨進出家のちつねに聖人の御房につかへて配所へもしたがひたてまつりけり、御臨終のとき隨進をめてのたまはく、念佛は様なきを様とすとするなり、たゞひらに稱名の行をまはらにすべし云々、乃至隨進いはく故聖人は念佛は様なきを様とす、たゞひたすらに佛語を信じて念佛せよ云云

是によつてみれば、此「様なきを様とし、様なきを様とす」とは、法然上人の御遺言と見ても然るべき御言葉である。而して親鸞聖人も亦同様に晩年に此言葉を喜ばれた。加之聖人の御遺言とも看做すべき、自然法爾章に、他の法然上人の御教化たる自然法爾の言葉と共に書き連ねて遺したされた。先師相承の片身と戴かねばならぬ。

諸此言葉の味を順次味はひ奉つて見やう。既に義無きを義とし、様なきを様とすと云ふ言葉それ自身が、如何にも何等の巧もなく、繕ひもなく、有るが儘に申された口調である。平たくいへば、あゝ、この道理理屈もなく、かくせねばならぬ、かくする、こうするといふ様な繕のない事である。なほ審に是を云へば、即ち法然上人の撰擇本願念佛の極生粹を示された言葉である。抑も撰擇本願の意味は、布施持戒乃至孝養父母、奉事師長を擇びて、唯念佛を與へたもの

のである。疑惑和讃に於て、反覆此佛智不思議を疑ふ事をとがめられた。そこで歎異鈔に於ても先づ此章に於て、「念佛は無義をもて義とす、不可稱、不可說、不可思議のゆへにとおぼせられさふらひき」と不思議を擧げて、此不思議を疑ひ、無義を義とする念佛に對して、異義を掃しはさむ人の出來た事を歎きて、是より其條々を下に擧ぐると云ふ前置きが、即ち此第十章である。故に此章は見様によりては、上來の九章を總括して、「念佛には無義をもて義とす云々とおぼせられさふらひき」と前九章、聖人の御教化を綜合して、これに背ひける異義を引出す様に、承上起下の一章と見る事が出来る。

念佛には無義をもて義とす、不可稱、不可說、不可思議のゆへにとおぼせられさふらひき。

此「無義をもつて義とす」といふ一言は、他力信心の極意を示されたる御言葉にして、親鸞聖人晩年の御教化に常に口癖の如く申されたる貴き言葉である。しかも此御言葉が大師聖人のおぼせである御自身いつも申さるゝ處である。そこで、いづれに法然上人の御言葉として傳へてあるかと云ふに、永觀堂に傳ふる西山上人の筆なる法然上人の御消息に曰く、

熊谷蓮生入道へ返答

淨土宗安心起行事

義なきを義とし、様なきを様とす、淺きは深きなり、只南無阿彌陀佛と申せば十惡も五逆も三寶滅盡の時の者も一期に一度も善心なきものも西東わきまへぬものも決定して往生を遂げ候なり、釋迦彌陀を證とす、

である。故に、我等は布施を要せず、戒行を要せず、乃至孝養父母、奉事師長を要せず、唯、專稱佛名の一つである。今無義と云ふは、布施も要せず、持戒も要せず云々と云ふことである。義とすとは、即ち念佛の一つを與へらるゝ事である。我等は、戒を持つも、戒無きも、布施をなすも爲さざるも、唯念佛の一つであるといふことが、義なきを義とし、様なきを様とすと云ふ事である。そこで私は、此法然上人の撰擇本願の味が親鸞聖人の教行信證の上に於ては、全く言葉を變へて、顯はれてある事を發現した。即ち上の第八章非行非善の事を講ずる時に引用した信卷の大信海の御自釋である。即ち「貴賤細素を簡はず、男女老少をいはず、造罪の多少を問はず、修行の久近を論ぜず、行に非ず、善に非ず、順に非ず、漸に非ず、定に非ず、散に非ず、乃至多念に非ず、一念に非ず」といふは、即ち撰擇集に云へる布施持戒乃至孝養父母、奉事師長を撰び捨てたる意味にて、義なき有様である。同じく御自釋の引續に「唯是れ不可思議、不可稱、不可說の信樂なり」とあるが、專稱佛名の念佛にして、即ち義とすと云ふ味である。そこで今の本文には、不可稱、不可說、不可思議のゆへにと申されたのである。かく味はひ來れば、撰擇本願の釋と、大信海の釋とは、全く符節を合せたるが如くである。

序ながら、撰擇集と教行信證と趣の異なる點をあげて見れば、撰擇集は、諸善萬行を撰び捨て、只念佛の一つを、撰び取る事を示されたのである。何れの行も及び難い、唯念佛ばかりぢやと追ひつめたのである。故に撰擇本願の釋には、第

一義を悟る智慧も發菩提心も何もかも消極的に撰び捨て、ある。而して教行信證は其選び取りたる念佛より、あらゆるものが積極的に現はれ来ることを示されてある。そこで教行信證には念佛の事を、第一義乗といひ、信心の事を淨土の大菩提心と云ふてある。かく、撰擇集は消極的に諸善萬行を撰び捨て、教行信證は念佛の一つより、無量の功德、一切の善本即ち一大藏經を積極的に含有し来るのである。是れ元より撰擇集に無い事では無い、即ち、念佛諸行を比較して、勝劣の義を立てる時は、念佛の中に所有四智三身十力四無畏等の内證、相好光明說法利生等の外用一切の功德を攝むと云ふ事は云ふてある。されど、諸善萬行を捨て、念佛に入ると云ふ、消極的方面を云ひ現はすが主眼である。かく絶対に唯一の念佛を取るが故に此念佛は絶対に不二のものと爲つて總ての物を具足する積極的のものである。其方面を著るしく云ひ顯はしたが教行信證である、今義なきを義とすと云ふ言葉でも、法然聖人の言葉では、何等のからひもないのが善いのかやと消極的方面を主とされてあるのである。然るに親鸞聖人は、其はからひ無くして、如來の御はからひによりて、不可稱、不可説、不可思議の功德を與へらるゝと積極的の方面を顯著に示さるゝのである。こは此處斗りてはなく、總べてにつきて此趣になる。教行信證の骨子たる如來廻向といふことは、法然上人には明に現はれて居らぬ。たゞ念佛は不廻向であると云ふ消極的方面の一言が有るばかりである。其反面を堂々として積極的に開顯したのが如來二種廻向の淨土眞宗の骨目である。又法然上人が信心證論の時、信心の變り合ふてあ

はしまさん人々は源空がまゐらんずる淨土へは、よまゐらせさふらばじ、とある消極的の言葉より、遂に淨土に報土、化土の區別を立て、三願、三經、三機、三往生の積極的の建立があらはれて來たらしい。今も法然上人が何氣なく、義無きを義とすと申された一語は、誓願不思議佛智不思議の積極的教化を生じ來り、不可稱、不可説、不可思議の、積極的の功德を開示せられたのである。

かく如來の誓願不思議を信ずることを此一語に示したまひて、義なきといふは善からんとも惡しからんとも、はからぬことである、義とするは如來のはからひにまかすことである、と示された。私に考ふるに教行信證には文句として義なきを義とすと云ふ語はない、併勿論其意味はあつたに違ひない、歸命の御自釋に命の訓に計也とあるは、如來の御はからひの意味である、而して義の字にはからふと訓することは、證卷體一如にして義をして分て四と爲すと云ふ義の左訓にはからふとある。かく此意味はあつた面影を見ることが出来る、されど明了此語を愛樂せられて、懇篤教示せられたのは晩年に著しかつたものと見える、末燈鈔に度々繰返したまひし法語を拜讀するが何より難有い。

末燈鈔第二章に曰、他力とまふすことは彌陀如來の御ちかひのなかに選擇攝取したまへる第十八の念佛往生の本願を信樂するを他力とまうすなり、如來の御ちかひなれば他力には義なきを義とすと聖人のおほせことにてありき、義といふは、はからふことばなり、行者のはからひは自力なれば義といふなり、他力は本願を信樂して、往生必定なるゆへ

にさらに義なしとなり、しかればわがみのわるければ、いかでか如來むかへたまはんとおもふべからず、凡夫はもとより煩惱具足したるかゆへにわるきものとおもふべし、またわかこゝろのよければ往生すべしとおもふべからず、自力の御はからひにては眞實の報土へ生すべからざるなり、行者の自力のはからひにては懈慢邊地の往生胎生疑城の淨土までぞ往生せらるゝことにてあるへきぞとうけたまはりたりし、同第七章に曰、また他力と申ことは義なきを義とすとまうすとまふすなり、義とまふすことは行者のをのゝのはからふことを義とは申すなり、如來の誓願は不可思議にましますゆへに佛と佛との御はからひなり、凡夫のはからひにあらず、補處の彌勒菩薩をはじめとして、佛智の不思議をはからふべき人は候はず、しかれば如來の誓願には義なきを義とすとは大師聖人のおほせに候き不可稱不可説不可思議は既に上に引用した信卷大信海の文にも出て居る。されど行卷にも同様に出てある。曰く弘願一乘海者成就就無碍無邊最勝深妙不可説不可稱不可思議至徳、何以故、誓願不可思議故、而して、此意味を和讃に

五濁惡世の有情の

選擇本願信すれば

不可稱不可説不可思議の

功德は行者の身にみたり

選擇本願信するとは無義を義とすることである、而して後の一句は草稿和讃には「功德は信者そたまはれる」としてある。そもゝかの御存生のむかし、おなじこゝろさしにして、あゆみを遼遠の洛陽にはげまし、信をひとつにして、心を當來

の報土にかけしともがらは、同時に御意趣をうけたまはりしかども、そのひとゝにともないて念佛まうさるゝ老若そのかずをしらずおはしますなかに、聖人のおほせにあらざる異義どもを、近來はおほくおほせられあふてさふらふよし、つたへうけたまはるゝいはれなき條々の仔細のこと

聖人御在世の昔、常陸の國よりはるゝ聖人を慕ひて上洛せられたる有様見るが如くである。了祥師の考に此章と第二章とを以て歎異鈔の著者は即ち常陸より聖人を御尋ねして承りた人の一人であると申されたは、如何にも適切なる犀利なる觀察と敬服せねばならぬ。されど之を以て本書は如信上人の作でない證據とするにはあまり力が弱い、たとひ最須敬重繪詞に如信上人が幼年の昔より長大の後にていたるまで禪牀のあたりをはなれず、學窓の中にちかつきたまひたれば」とあれはとて少しも東國に居たまはぬ、東國、京都との間を往復せられぬ筈はない。唯圓坊なり如信上人なり、誰にしても自らも他人の人も聖人を慕ひ上洛して、面り聴聞せられた、夫等の人々は心を一にして同じ眞實報土に往生する一味の安心に住せしも、其人々に伴ひて聴聞せられた人となれば、色々勝手なことを言ひ、我等がはからひを皆打捨て、如來の御はからひにまかすべき無義の者たる念佛に、異義を言ふ人の出來たことを慨歎されて、己下一一其條々を下に擧ぐると票示せられたのである。明年一月號より其各條につきて講し奉らん、南無阿彌陀佛。

嘆 咏

草津詠草

麻 郷 生

癩病癒ゆる日知らに毛の國のみ山の奥に御名
呼ぶはらから

現身の眼しひ髪をもち手ならひたる湯の澤人は
み佛による

白根路ゆかへりみすれば大浅間の烟たなびく
雪の毛野原(白根登山の途にて)

湯の流れたさりと落つる瀧下に石の佛はえみ
て立たせり

流れゆく白雲近く山の上の青草原に影うつ
ろへり

白雲は浅間の峯を掩へども小浅間の山は鮮
やかに見ゆ

のぼりたつ湯畑のけむり眞白にぞ草津の山
に月かゞやけり

紅葉せる浅間麓路駒の背に過ぎ来しひとひ
常思らえず

檜列樹黄に紅にもみぢせる六里ヶ原にいな
く我が駒

信仰なき我が門のべに雪の夜をまほき聖人
はとはに立つらん

紹

介

佛說無量壽經佛說阿彌陀經梵文和譯支那語

文學博士 南條文雄 師譯

本書は南條師が英國牛津に於て馬博士に就き梵文研究の際、兩博士の名に於て
クレンドン印書局より刊行せられたる無量壽經及び阿彌陀經の梵文を和譯せら
れたるものである。判此の梵文出版につきては、兩博士が種々の梵本を校合して
經營困苦せられたるもので、實に心血の塊といふべきものである。南條博士が二
十六年前に斯の如き大業を成就し、佛敎に大貢獻をせられたるにも係らず、佛
敎者自身が其の功勳を認めなかつた事は遺憾の極であつた。當時此の書の刊行せ
られたる時に、西洋に於ける評判は、恰も宗教改革時代にエラスムスが希臘語の
バイブルを發見したと同様の光を淨土門に與へるものとして認められた。勿論梵
文研究者は博士の高恩を感謝しつつあるは言ふ迄も無いが、世人一般は今日に至
る迄は、其の内容の如何を知らぬ事を得なかつた。然るに今度博士は其の和譯を
出版し、殊に從來存在の支那の諸譯と比較校合して完全なる大小兩譯の和譯を
一般に示されたるは感謝に堪へぬ處である。製本紙質印刷等も能く内容に叶ひて
確實に出来てゐる。(東京 無我山房發行 定價壹圓五拾錢)

梁川寸光錄

遺稿 書簡集上卷

故 網 島 梁 川 師 著

此の兩書は病間録同光錄と同形の叢書にして、同師の信念を道基するものゝ必
讀の書籍である。前書は同師の平素感想の浮ぶに従つて記載せられたる手控を集
めたるもので、寸光集、願書錄(一、二、三、四)梁川隨筆、枕頭雜筆、病間日記
(一、二)の數篇を秩序よく編輯してある。殊に年時を追うて思想の移り變はりな
きづくる事を得、又其の關係に浮びたる體の思想其のものを味はう事を得るは、

最も趣味ある次第である。病間録及同光錄を綴ける人は、又此の書を綴いて其の
素朴的思想に接する事が出来る。言ひ換へれば流麗の文字となり、一貫の議論と
して現はるゝ時は、既に幾多の推敲と精練を経たる作品である。されど此の集に
輯まりたるものは其の原料にして何等の修飾を施されて無い。其の點に於ては
却て天來の妙想感得の心相を何事か出来る。猶ほ其の間に於て師が眞生活の有
機が顯はれて其の道念の高さと求道心の切實なるものが顯はれてゐる。

後者は名の如く師が二十九年來の書簡集の上編である。之に依つて師が信仰的
交際の方面を遺憾なく何事か出来る。即ち已上の數書に顯はれる思想が、いか
に交際文章の上に顯はれてあるかを見るべきである。而して何れも其の内容は氏
が濃かなる友情と美はしき情操とを顯はしてゐる。師が久しき病床に於て如何に
信念を養ひ、又其の交はる處の人に感化を及ぼしたかを證すべきである。師の晩
年は健に文章を以て傳道せられたと謂つべきである。下篇に至つて増々其の點が
顯はるゝであらう。(東京京橋獅子吼書房發行 定價前書は壹圓貳拾錢 後書は
壹圓拾錢)

エビクテタスの教訓

稻葉昌九師譯

清澤先生が愛讀せられたエビクテタスの教訓を斷金の親友稻葉昌九師が翻譯
せられたるものである。清澤先生自から題して西洋第一書と書かれてあつた其の
手澤の書を稻葉師が讀ひ得て歸り、日々綴讀して之を味はひ、宛然先生の口吻、
温厚たる面貌を擧げて前に現するの思をなし、先生が千歳の一知己として愛讀
せられたる本書を、生前の知己たる稻葉師が翻譯せられたる事なれば、如何に心
血を注がれたるかには特に言ふを要せぬ、譯文の頗る明瞭にして何人にも理解し易
く、又頗る親切にして言文の意を損ぜざる事を勉めたるの苦心察すべきである、
世の道徳に處して安慰を求め、克己自制に勉めんと欲する修養の士に好開の寶糧
である。吾人は稻葉師が斯の如き稀有の書籍を世上に紹介せられたるの勞を感謝
するものである。(東京集鶴 無我山房發行 定價七拾錢)

釋迦牟尼傳

文學士 常盤大定師著

從來出版したる釋迦傳多しと雖も、多くは南方所傳の材料によりて、其の人間
的方面を寫す事を主としたものであつた。然に本書は北方所傳の大乗佛敎に傳ふ

正信偈講話

多田鼎師著

眞宗の信者が日々誦する親鸞聖人の正信偈を著者の流麗なる筆と清新なる感
想を以て講話せられたるものである。如何に能く手のき行届いたる親切なる著書
にして、正信偈を和譯し、讀み方を示し、字義を解し、大意を掲げ、文科を附し
而して春風面を拂ふが如き態度を以て温かなる信念を導きと説き去り、説き來り
て、人の心に届けんと勉められてゐる、全體正信偈は聖人の心血の塊にして、教
行信證の中心とも謂つべき貴重偈文である。我等は日々之を拜誦して、其の味は
ひの長くして且つ遠きを渴仰する次第である。然れども從來は眞宗の信者のみに
限られて、其の以外の人に知らず事出の來なかつた事を遺憾に思つて居たに、此
の書によりて殊に青年の道を求むる者をして偏く其の德澤に浴せしむることの出
來たのは、深く感謝する處である。猶ほ巻頭には清澤先生の感謝を掲げ、師父に
對して至孝の情を披瀝したるが如き、頗る感動に堪えぬ。本書は翻版五百頁の大
冊にして、殊に其の體裁印刷用紙に意を用ゐたる事周到を極めてゐる。(東京集鶴
無我山房發行 定價壹圓五拾錢)

香月院語錄

和田龍造 今津紹柱 兩師編

本書は眞宗大谷派宗學界に於ける泰斗として、學德一世に隆き、殊に宗學の標

警世新報改題
毎月一日發行

●大發展後の本誌新年號を見よ!!

鐘警の會社明燈の界教

世言

定價一部金六錢
一ヶ年壹圓八拾錢
注文は前金に限る

- | | | |
|---|--|---|
| ▲年頭の訓誡
▼活教訓
▲予が樂天生活
▼新年の修養
▲社會改良と宗教
▼聖句小解
▲僧俗不二論
▼小佛手柑
▲本年の干支
▼兒童の宗教
▲家庭の心理
▼新春所感
▲眞心の解
▼其他詞藻欄には長詩短歌文彩花の如く報道欄には教界の時事を網羅す | ▲不自由の恩
▼入浴衛生談
▲通俗佛教大意
▼富麗物語
▲阿彌陀佛論
▼篤子内親王
▲自活と宗教
▼鶏のお祝
▲傳教大師
▼養鷄の趣味
▲感化と人格
▼渡し待つ間
▲人性究竟の要求 | 前田博士
來馬琢道
大隈伯爵
佐藤巖英
板垣伯爵
妻木直良
三宅博士
小牧菱嶺
島地默雷
道元翠溪
高島平三郎
干河岸櫻所
北村學士
英健也
島地大等
池田荒北
柘植秋畝
祖扇生
留岡幸助
秋庭支丸
泉學士
和久源藏
深作學士
大島資水
羽溪了諦 |
|---|--|---|

發行所 東京本町五丁目八番 大樹園 賣捌 市内各地

●靈界の寶庫趣味と實益の無盡藏!!

浩々
洞編

佛教辭典

製本縦五寸 横三寸五分
紙數千五百頁 舶來上等紙
全文六號文 字二一段組
クロス綴 堅牢美本
定價金二圓 小包料十二錢

佛典を讀みて其妙旨を味はんとするもの、常に苦む所は、其の言語の難解なるにあり、本書は此の遺憾を一掃せんが爲に、佛教本典の要語、佛教各宗の術語は勿論、漢和の書や新刊書に出づる佛教に關係ある教理、歴史、地理、人名、寺名、書名、制度、美術、文學等の梵漢和の語數二萬餘を集め、之を極めて近代的にして而も要を得て平易に解釋し、且つ叮嚀なる字音索引を附したるもの也。本書一たび出て、在來の秘密殿たる佛教は一般社會の前に開かれ、以て吾か讀書界に一新世紀を來すことは信じて疑はず。されば本書は佛教研究者、布教家殊に佛語の難解に苦む所の教育者及び一般の讀書家、並に各學校圖書館各寺院に取りて必須缺くべからざるもの也。

豫約

豫約價金一圓四十錢 小包料十二錢

(但し東京市は四錢、臺灣國樺太三十五錢)

方法

來る二月廿八日までに豫約價及び小包料を添へて御申越の御方へは四月五日より着金順により送本可仕候但し部數に限りあり期限内と雖も定數に充たば乍遺憾謝絶仕候尚ほ見本入用の方は往復はがきにて申込まれたく候

豫約申込所發行所

東京巢鴨町二ノ三五
振替口座東京三二二三番

浩々洞
出版部

無我山房

改清澤滿之師序 近角常觀著

訂正 增補

信仰之餘瀝

第拾版 定價卅錢 郵稅四錢 袖珍美本

本書は著者が入信劈頭の著作にして、當時著者が心内に経験せし煩悶解脱、慈愛感謝の信仰を有するが儘に眞摯卒直に告白懺悔したるもの。江湖同朋の愛讀絶ゆることなく、發行以來既に九版を重ね、發行部數二萬以上に上り、本書を縁として同一信仰に入り給ひし人々の多數なるは洵に感謝に堪へざる所也。然るに久敷く品切にて信友諸君の高需に背き居りしが、今回彌々其第拾版を刊行するに至りたり。殊に今回に於て著者は本書の完全を期する爲め、根本より版を改めて誤植訂正は勿論、新に増補する處六篇あり。猶ほ最後に爾後の信仰經過を告白して、附録として「予が信仰的實驗」の一篇を加へたり。斯くして本書は面目を一新するに至りぬ。

新刊

信仰之餘瀝要畧

來・彌・々・出・定 價 五 錢 郵 稅 二 錢 (但し四冊迄は郵稅二錢也)

部數に應じ充分割引す

本書は某師の勸誘により、有志諸君が傳道求道の資に供せんが爲に「信仰之餘瀝」中の眼目「宗教的同朋」「活ける懺悔」「信界に於ける監獄」以下二章を拔萃し、傳道用小施本として印刷したるものなり。傳道に志し給ふ諸君の御試用を切望す。

●●●新刊廣告●●●

近角常觀著

親鸞の信仰

附 錄 眞 宗 教 證

定價七十錢 小包料八錢 クロース綴 美 本

彌々出來せり

本書は嘗て本誌に連載せる、眞宗慶嘆に大訂正を加へて一書に纏めたるものなり。絶對他力信仰の大權化たる親鸞聖人一代の教證に對し。著者が平生抱懷せる渴仰、尊崇、憧憬の至情は本書に溢れて餘蘊無し。

發行所 東京巢鴨町振替口座東京 無我山房

取次所 本郷區振替口座東京 森川町二二六六九番 求道發行所

規定

- 一 本誌は毎月一回一日發行とす
- 一 本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一 本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、但し其節には登記料金貳錢必ず御加算を請ふ
- 一 郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
- 一 郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一 凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
- 一 本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の住所を通知する事
- 一 回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一 本誌定價左の如し

一 部	一ヶ月	六ヶ月	一年
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢
●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢			
郵稅一冊に付五厘			

明治四十一年十一月廿七日印刷
明治四十一年十二月一日發行

發行所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所
發行兼編輯人 近角常觀 印刷人 白土幸力

大賣捌所 東京市神田區表神保町 東京堂

發行所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所

前號要目

求道

◎如來の加威力

◎歎異鈔と蓮如上人御一代聞書

感謝

◎晩秋の所懐◎常照の光◎御正忌◎春秋

九十年

講話

◎願力成就

告白

◎唯佛のみ眞實也

近角常觀

後藤辨宏

◎曠劫多生の御手引き

講義

碓氷くに

◎他力信仰の淵源

三 信仰と人生

近角常觀

◎やむひと

時報

増田八風

◎求道の好季節

◎大谷派傳燈式

◎沼津の同朋